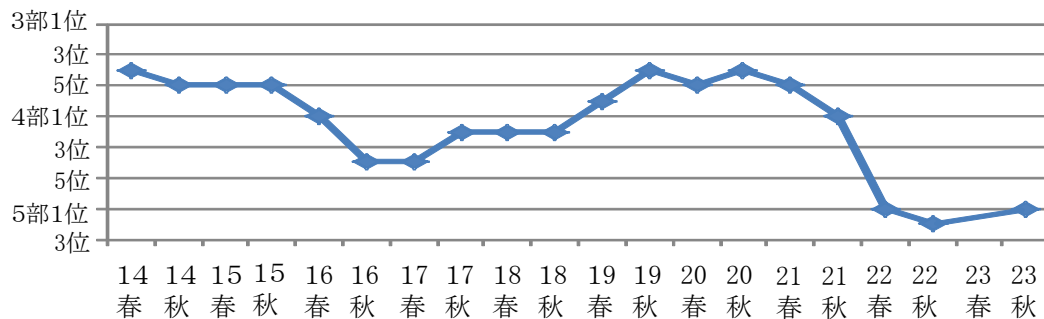


7-1. 年表(直近10年)

年表にて、ここ10年での主なトピックスを振り返ります。

2002年～2006年(前半)

年	2002	2003	2004	2005	2006
部長	高宮利行教授 (文学部教授)	関場 武 (文学部長)			
監督	森下一夫(昭和54年卒)		五月女季孝(昭和60年卒)		
主将	田添 亮	落合 惇	吉岡 達循	森 祥広	広田 崇
主務	武井 由紀子 (旧姓 永島)	朽見 太郎	坂根 洋介	広田 崇	小粥 貴善
リーグ戦	下記表参照				
早慶戦	渡邊渉／野村由貴子 単勝利	吉岡達循 単勝利		中村翔一 山口悦伺組 複勝利	中村翔一 山口悦伺 組 複勝利
公式戦	田添亮 星合崇英 組 全日本学生 複出場 武井由紀子(永島) 野村由貴子組 全日本学生複出場	野村由貴子 全日本学生 単9位入賞			
外合宿			千葉県富津	静岡県御殿場	茨城県潮来
主なトピックス	吉岡・松下VS池田進太郎ダブルス	筑波遠征(筑波生宅へ宿泊) 合同練習会が初開催される	慶應義塾・女子高より8年ぶり入部 バドミントン講義(コーチ) 留学生来塾(バトリアン)	マレーシア代表選手サリム氏来塾 セキバー杯始開催される。 5大学OB戦が6大学へ変更。現役戦追加。 留学生来塾(エイドリアン)	幼稚園合宿に参加 幹部に加えた新たな役職を増設 早慶戦・主将ダブルス戦を最後に実施・広田崇・小池徹 中村翔一・山口悦伺二年連続勝利



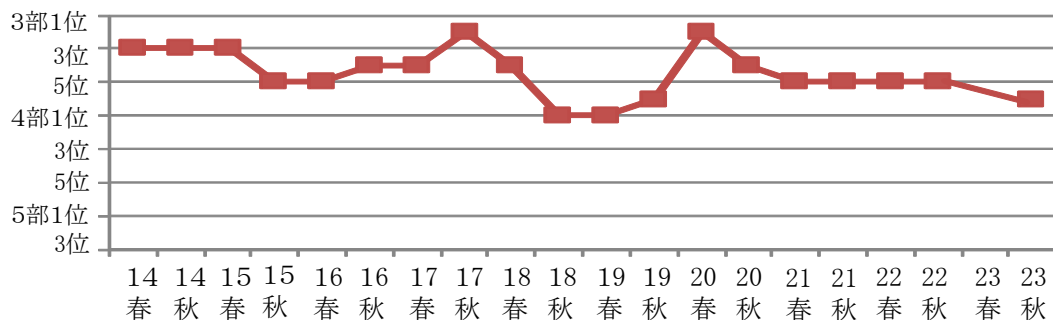
男子リーグ戦成績推移

7-1. 年表(直近10年)

年表にて、ここ10年での主なトピックスを振り返ります。

2007年から2011年(後半)

年	2007	2008	2009	2010	2011
部長	渋谷 蒼一郎 (文学部教授)			田村 俊作 (文学部教授)	
監督	五月女 季孝				
主将	手塚 純平	光井 翔	渋谷 康太	真栄城 優	山口 哲生
主務	吉永 裕貴	和栗 恵	中津 哲彦	石川 陽菜	須賀 亮太 田中 優子
リーグ戦	下記表参照				
早慶戦		山口悦伺 単勝利 山口悦伺 渋谷康太 複勝利	森本修介／植田 悠 単勝利 中島優 森本修介組 複勝利		竹内裕詞 単勝利
公式戦			植田悠 関東学生新人戦 単A 5位入賞	植田悠 関東選手権 単A 5位入賞	植田悠 全日本学生 単出 場
外合宿	茨城県潮来	栃木県真岡	山梨県山梨	群馬県桐生	茨城県ひたちなか
主なトピックス	名古屋遠征。 ホームページ刷新。 本田裕士・関東学生連盟委員選出 中村翔一・LEAP講師就任 麻彦流行・関東学生棄権 早慶戦結団式(早稲田饅頭を食べる)	元日本代表選手・藤本ホセマリ氏来塾 山口悦伺・早慶戦単複勝利 部員リレー日記開始 留学生来塾(カール・オリヒエ)	マレーシア代表選手・リーワンフ氏来塾 森本修介・カリフォルニア大学留学 早慶戦全体アップ中止 インフルエンザ流行・東日本棄権	記念館補強工事・娘谷体育館完成 親子バドミントン教室が初開催される。 慶立定期戦初開催 復唱中止	被災地義捐金送付 東日本大震災による春リーグ戦中止 マレーシア代表・イスワン氏来塾 ホームページ写真増



女子リーグ戦成績推移

7-2. エピソード紹介<活動範囲の拡大>

ここ10年では、バドミントン部活動範囲が拡大していきました。ここでは、中でも代表的だった取り組みについて紹介します。

1. 高校生合同練習会の開催

【開催にいたった経緯(編集委員記)】

平成15年の夏に初開催となった。当時は入部する部員数が少なくなり始めたばかりか、実力的にも低迷していた。そのためOBであり当時の監督であった森下一夫(昭和54年卒)や茂木一秀(平成4年卒)が学生を先導して、大学バドミントン部の魅力を高校生にアピールし、入学後にバドミントン部を選択肢と出来るように取り組んだ。始めはOBの先導で行っていたが、後に学生が主体で開催するようになる。

【開催当初の苦労と現在(編集委員記)】

大学生のオフィシャル(通常)の練習時間帯では、本合同練習会の実施よりも大学生の練習を優先していた。そのため、練習会の開催時は、大学生のオフ期間や練習が休みの期間に当たることが多く、休みの合間を縫って高校生の練習会に協力する部員が少なく、俺は関係ない、という風潮が強かった。しかし、徐々に意識が改善に向かい、学生が主体となって開催するようになってから以降は、学生が積極的に協力するようになり、実際に練習会を契機として入部をする部員も現れるなど成果にも結びついていった。

【最近の声(平成23年卒 船矢 竜太)】

合同練習会は、高校生がバドミントンを楽しんでいる姿を見られる場であり、また慶応バドミントン部の魅力を高校生に伝えられる場でもあります。初めて合同練習会の運営を行ったのは、大学2年の7月。練習メニューを考え、当日の運営方法を頭の中でシミュレーションしました。しかし当日は、多くの見知らぬ高校生を前に緊張してしまい、スムーズな運営を行えませんでした。練習メニューを変更することにもなってしまう、高校生に対して申し訳ないことをした、と落ち込みました。それでも、高校生

が声を出しながら楽しそうにバドミントンをしている姿を見て元気になりましたし、練習会後に高校生から、「有意義な練習会だった」、「また参加したい」、「慶応の練習に行きたい」といった言葉をもらい、非常に嬉しくなりました。慶応体育会バドミントン部には、様々な役職がありますが、高校生と一緒に、ギブアンドテイクの関係で自身も成長できるのが、合同練習会担当の魅力です。

【最近の声(平成24年卒 田中 優子)】

今回はバドミントン部の恒例になりつつある、合同練習会について執筆させていただきたいと思います。

合同練習会は、近隣の高校生を招いて、大学生と一緒に練習することで、慶応バドミントン部の魅力を知っていただき、興味を持ってもらうことを目的として行っています。

私は大学2年の時に合同練習会の担当として、同期の植田悠と共に練習会の運営をしました。私自身も高校生の時に合同練習会に参加させていただいたことが、入部の1つのキッカケになった為、多くの高校生に我が部に興味を持ってもらおうと準備運営を行いました。高校生と一緒に練習することで、私達大学生も若いパワーを貰えたり、「また参加したいです」という声を聞いて、これからも継続的に、このような練習会を開いていくことの大切さを感じました。

ここ1・2年は合同練習会にて、高校生達に我が部の魅力をより知ってもらおうと、LEAPやメンタルヘルスケアなどで学んだ知識を練習に取り入れたり、慶応バドミントン部ならではの魅力を伝えようと色々工夫をして、練習会を行っています。また、勧誘担当と連携をとり積極的に練習会活動を行っています。

今後もこのような積極的な活動を通し、慶応義塾体育会バドミントン部全体がより発展をすることを願うと共に、私もOGとして出来る限り、バドミントン部の発展に貢献していきたいと思っています。

		年度										
		2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	
開催月		3月	2月	12月	3月 7月	7月 12月	7月	12月	3月 7月 12月	7月	1月	
参加人数	男子	27	35	29	28	36	14	26	60	23	15	
	女子	17	16	12	16	39	14	17	32	13	0	
	合計 [人]	44	51	41	44	75	28	43	94	36	15	
参加高校	男子	慶應義塾 小山台 桐朋 光陵 川和 桐蔭	慶應義塾 小山台 国立 希望が丘 小石川 公文国際 竹早 桜ヶ丘 川和	慶應義塾 小山台 川和 桐朋 公文国際 海城 調布北 小石川	小山台 桐朋 海城 中央大悪 附属 桐朋 公文国際	慶應義塾 小山台 桐朋 日比谷 中大附属 調布 緑ヶ丘 湘南	慶應義塾 小山台 桐朋 日比谷	慶應義塾 小山台 桐朋 日比谷	慶應義塾 春日部 川和 希望が丘 小石川 多摩 柏陽 八王子	慶應義塾 栄光学園 小石川 桐朋 春日部 小岩 翠嵐 逗子開成 立川 八王子 青山 市ヶ尾 川和 立川 桐蔭	慶應義塾 青山 小岩 立川 熊谷西	慶應義塾 平塚江南 立川 公文国際
	女子	公文国際 川和 小石川 小山台	小山台 希望が丘 桜ヶ丘 調布北	調布北 小山台 公文国際	小山台 桜ヶ丘 慶應女子 中央大学 附属	小山台 中大附属 慶應女子 日比谷 公文国際 湘南 緑ヶ丘 多摩	慶應女子 多摩 小山台 日比谷	川和 希望が丘 小石川 多摩 八王子	小石川 小岩 翠嵐 八王子 慶應女子 青山 川和	青山 小岩 立川 慶應女子	-	

7-2. エピソード紹介<活動範囲の拡大>

ここ10年では、バドミントン部活動範囲が拡大していきました。ここでは、中でも代表的だった取り組みについて紹介します。

2. LEAP講師・中村翔一

【概要】

LEAP(Leadership Education Athlete Program:リープ)とは、慶應義塾体育会が人材育成を目的として2002年度から新設した教育プログラムのことであり、慶應義塾体育会の各部部員を対象に、リーダーシップ、マネージメントに必要なスキルを体系的知識として習得させ、それを部活動で実践させることを可能にする教育プログラムのこと。そして体育会各部の四年生や、体育会卒業生をLEAP講師として招聘し、直に体育会部員を指導する指導体制を執っている。

【我が部との接点】

慶應義塾体育会バドミントン部では、LEAPの教育プログラムに毎年現役部員が参加し、LEAPで培ったチーム運営のスキル、リーダー論、マネジメントスキルなどを部内に持ち帰って、パフォーマンスの向上に努めている。

中でも中村翔一(平成20年卒)は、LEAP講師として体育会他部の学生に指導をするなど、LEAPにおけるプレゼンスが非常に高かった。

【活動した感想(平成20年卒 中村翔一)】

LEAPという実学を伴う研修を実行するに当たり、講師自らが実践し、経験則に基づきレクチャーを行うことが必要となります。自己責任と自己実現する力と意識が芽生えました。また、慶應義塾体育会と卒業後も講師として関わることが出来る権利を持つことが出来たことは大変ありがたいことです。



【受講した感想(平成21年卒 光井 翔)】

組織とは何ぞや、組織の中の個々とは何ぞやの基本的な考え方を教えてくれる良い機会になった気がします。実際に、当時主将として部をまとめるヒントとなりました。具体的に大事であると感じたのは、そもそも自分自身が組織(部活)に所属している以上、所属員一人ひとりが組織に重要な影響をもたらしているという意識を持つことです。この意識が醸成されると、組織→個人、個人→組織の双方向からの相乗効果が生まれ、組織力が高まり、ひいては、個人力が高まるという良い循環が生まれると実感しました。この体験と、自分自身の意識の醸成は社会という、より大きい組織に出た今、少なからず自分の力となっていると感じております。



3. 関東学生連盟委員選出

～学生連盟に関して(平成23年卒 本田裕士)～

【学生連盟とは】

大学生におけるバドミントン競技の更なる普及と競技力向上、つまりは大学バドミントン界の発展を目的としている組織であり、加盟大学・選手の管理や大会運営、地区によっては講習会なども行っている。地区学連は全国に7つ(北海道・東北・関東・中部・関西・中四国・九州)ある。また、その上層機関として(公財)日本バドミントン協会が定める全国7連盟(実業団・レディース・教職員・学連・高体連・中体連・小学生)の1つでもある全日本学連がある。

【慶應と学連の歴史】

大学バドミントンの歴史が塾バドミントン部によって切り拓かれたことからわかるように、学連も塾の偉大なOBの方々が礎を築いた。大学リーグのもとである慶應・明治・立教の三校が中心となって今の関東学連を設立したのである。また、私がかつて関西学連OBの方から聞いた話では、「昔、関西学連を立ち上げようとした際には慶應の六角さんをはじめ数名が駆けつけて細かく指導してくれた。そのおかげで今の関西学連がある。」といったように、関東のみならず他の地区学連にも塾バドミントン部が大きく寄与していた。

【学連の活動】

関東学連に関しては約200校、3000人という大規模な加盟大学・選手の登録・管理に、年間4つの主催大会(春リーグ・関東選・秋リーグ・新人戦)を行う。そのほか、全日本学連主催事業についても運営・協力を行うため、東日本学生、全日本学生(インカレ)、東西対抗競技大会などについても役員が一部派遣される。その中でも東日本学生では、自力でインカレ出場権を得られなかった選手から地区推薦を選定するといった大変重要な業務もある。

【活動した感想】

今思うと、とにかく拘束時間が長い!の一言に尽きる。並行して東京都学連の委員をしていたこともあり、4年次には大会運営で体育館にいた日数が60日を超えていた。当然、大会を行う上で最も大変で重要なのは準備段階なので、その何倍もの日数を事務所で作業をしていて、記念館での練習に出られるのが2週間に1回程度だったことが非常に残念に思う。しかし、この時の経験や人脈が生きて今でも日本協会や埼玉県協会の活動に不自由なく携われているので、今後長く続いていくであろう自分のバドミントン人生にとってはベースとなる貴重な活動だったのだと確信している。

【慶應として参加する意義】

創成期より大学バドミントン界を牽引してきた慶應バドミントン部。それはプレーの実績だけでなく、学連のトータルマネジメントにおいても同様だった。プレーヤーと運営サイドは表裏一体、プレーで再浮上を目指す慶應にとってはその足掛かりの1つとして、まずは運営サイドの学連で大学バドミントンを再びリードしていく存在になる必要があるのだと思う。

(余談:裏で打算的なことを画策するならば、学連で活躍することによってトップの大学の選手と幅広く仲良くなるので、一般的に「強いプレーヤーの兄弟もまた強い」傾向を利用して、仲良くなった選手たちの弟・妹などを勧誘し続ければ、いずれはそういう成果も出るのかもしれない・・・)

7-2. エピソード紹介<活動範囲の拡大>

ここ10年では、バドミントン部活動範囲が拡大していきました。ここでは、その中でも代表的だった取り組みについて紹介します。

4. 慶立定期戦開催

【興り(平成23年卒 三澤悠大)】

2009年12月13日、慶應義塾大学対立教大学バドミントン対抗戦(以下、慶立戦)が行われました。この対抗戦の実現は、同年の秋季リーグ戦後に立教大学の金子監督にお話しを持ちかけていただいたことがきっかけでした。

「かつては、慶應と立教が大学バドミントン界を先導し、互いに良きライバルとして戦っていました。しかし、いつしか両校ともに低迷を余儀なくされ、関係は疎遠になってしまいました。ここ数年、ともに3部で戦う機会も増え、OBの方々も単なるリーグ戦以上に対戦を楽しみにしているというお話を耳にするようになり、対抗戦を行うことによって、両校の関係を再び活発にし、バドミントンの技術も互いに高め合っていくきっかけにしたいと思います。また、両校ともに部員数が多く、大学初心者からインターハイ出場者まで幅広い層の選手達がいること、レギュラーではない部員達が団体戦慣れしていない、という状況もとても似通っています。対抗戦を単なる練習試合ではなく、リーグ戦のような緊張感ある雰囲気の中で、部員全員が出場できる新しい形の団体戦として実施してみませんか？」

本塾としても非常に有難いご提案でしたので、喜んで引き受けさせていただき、その後、両校幹部で数回の打ち合わせを行いました。慶應と立教の単なる練習試合ではなく、一方で、早慶戦のような大きな定期戦でもなく、事前準備に必要以上の手間やお金をかけないような大会にしようという話で企画されました。

【形式(平成23年卒 三澤悠大)】

男子はA、B、Cの3チーム、女子はA、Bの2チームで行い、ともに全部員が出場。チームの勝敗は、5つの団体戦のうち3つを勝利した大学の勝ちとする。

試合後、各チーム(10チーム)のMVPを各対戦チームの選手の投票によって選出。MVPには、両校OB会より副賞を授与。

【感想(平成23年卒 三澤悠大)】

初めての慶立戦ということで、正直どのような雰囲気で行われるのだろうという気持ちでした。リーグ戦でもない、早慶戦でもない、練習試合でもない、両校の部員達の試合への臨み方がよくわかりませんでした。しかし、試合が始まってみると各選手目の前の試合を必死で戦い、レギュラーだけでなく、全員がチームの勝利に向かっていくという文字通り総力戦の団体戦となり、コート外での応援も含め、チームの総合力競い合えるものであったと思います。試合の結果としては、立教大学に惨敗してしまうということになってしまいましたが、試合以外にも、昼食の時間や有志での懇親会を通しての交流もすることが出来、バドミントンだけでない多くの刺激をいただくことができ、大変有意義な一日とすることが出来たように思います。

慶應と立教は、関東大学リーグ戦が始まった当初から切磋琢磨し合っていた仲だとお聞きしました。今は慶應が立教に勝利することが出来ない状況にありますが、今後もお互いに刺激し合いながら良い関係を築いていければ嬉しいです。互いのチーム状況も日々変化していくと思いますので、対抗戦の形式を固定してしまうのではなく、臨機応変に対応し、継続しやすい工夫を施していくことも必要になってくるのではないのでしょうか。



【第一回の結果】

<男子A> ●本塾0-5立教大学

●S1真栄城0(7-21、11-21)2遠藤

●S2三澤0(13-21、10-21)2岡野

●D1真栄城・山口0(21-19、14-21、8-21)2国府田・阿部(慎)

●D2野村・川口0(14-21、12-21)2岡野・阿部(雅)

●S3山口0(20-22、14-21)2阿部(慎)

<男子B> ●本塾0-5立教大学

●S1小澤1(21-16、11-21、13-21)2谷脇

●S2岩橋0(13-21、19-21)2下田

●D1小澤・原0(11-21、4-21)2戸辺・久保田

●D2船矢・岩橋0(12-21、11-21)2井上・下田

●S3船矢0(13-21、16-21)2戸辺

<男子C> ●本塾1-4立教大学

●S1柳原0(16-21、17-21)2横関

●S2鈴木1(18-21、21-15、13-21)2村上

●D1本田・三浦0(6-21、11-21)2渡辺・横関

○D2柳原・鈴木2(21-12、21-9)0森・土肥

●S3本田0(17-21、18-21)2渡辺

<女子A> ●本塾1-4立教大学

●S1佐保田0(7-21、6-21)2横尾

●S2清家0(4-21、7-21)2高橋

●D1石川・佐保田0(4-21、8-21)2卯木・横尾

●D2松本・悠0(20-22、17-21)2佐藤・坂上

○S3松本2(17-21、21-19、21-18)1関根

<女子B> ●本塾0-5立教大学

●S1清家0(8-21、9-21)2林

●S2村尾0(4-21、6-21)2酒井

●D1清家・石川0(13-21、16-21)2小原・林

●D2佐保田・村尾0(10-21、7-21)2益田・植木

●S3石川0(11-21、19-21)2小原

本塾MVP

男子A: 山口哲生(2年)

男子B: 小澤雄貴(1年)

男子C: 鈴木章伸(1年)

女子A: 松本悠莉亜(2年)

女子B: 石川陽菜(3年)

立教MVP

男子A: 阿部慎也(2年)

男子B: 横関拓也(1年)

男子C: 久保田憲(3年)

女子A: 関根みのり(2年)

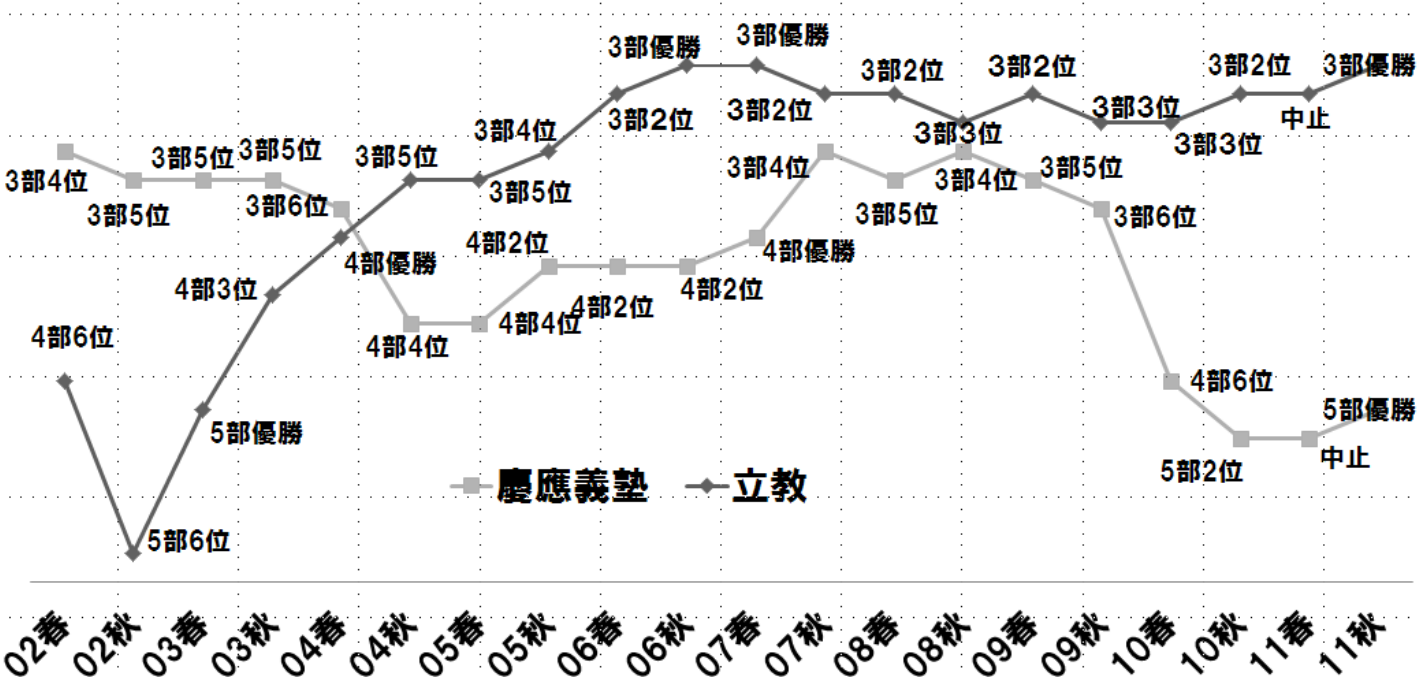
女子B: 小原美望紀(2年)



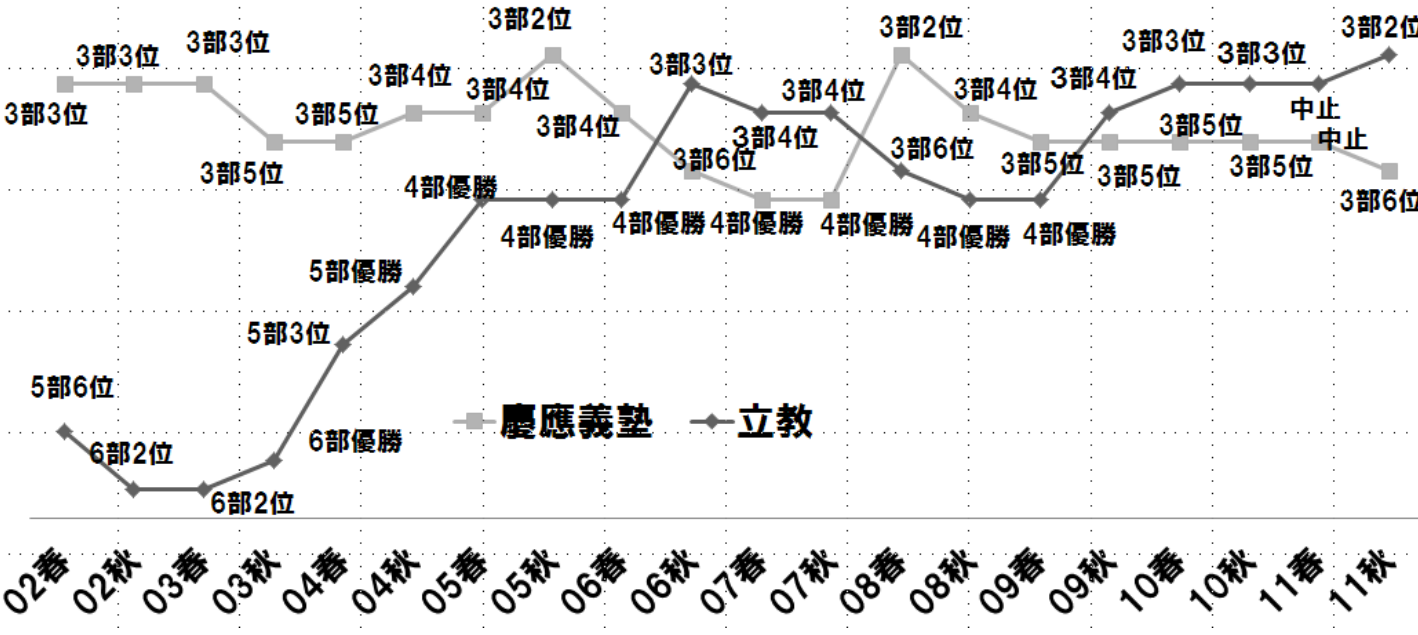
7-2. エピソード紹介<活動範囲の拡大>

ここ10年では、バドミントン部活動範囲が拡大していきました。ここでは、その中でも代表的だった取り組みについて紹介します。

【参考】リーグ戦成績の推移



男子：慶應義塾大学と立教大学の10年



女子：慶應義塾大学と立教大学の10年

7-2. エピソード紹介<活動範囲の拡大>

ここ10年では、バドミントン部活動範囲が拡大していきました。ここでは、その中でも代表的だった取り組みについて紹介します。

5. 幼稚舎合宿初参加

【概要】

セキバー杯以降もALL慶應の関係を継続していきたい。体育会バドミントン部は、幼稚舎バドミントン部の合宿に帯同し、先生や生徒とバドミントンを通して親睦を深めています。

【参加者】

慶應義塾幼稚舎バドミントン部生徒
慶應義塾幼稚舎バドミントン部顧問 武田 敏伸
慶應義塾体育会バドミントン部
永井敦美・井上雅博・吉永裕貴・中村翔一・植田啓生

【開催日】

【2005年度】8月、於：群馬県上毛高原
【2009年度】8月、於：静岡県ヤマハリゾートつま恋
【2010年度】8月、於：福島県東白川群翔倉町

【参加者の感想(平成20年卒 吉永裕貴)】

2005年8月、日吉合宿の疲れを癒す暇もなく、同期の中村翔一と共に群馬の上毛高原へ。幼稚舎バドミントン部初の合宿にコーチとして参加するためである。参加は我が部としても初の試み。事前に顧問の武田先生と打ち合わせ、指導するよりもバドミントンの楽しさを伝えるという目標を確認しあった。合宿参加者は、小学五、六年生の元気な女の子8人。初めはまるでシャトルを打てず、ただ羽根付きをしている状態だった。しかし、子供の順応力は凄い！わずかな期間で指導の成果が現れたのか、最終日には何人かがスマッシュを打てるまでになっていた。練習が終わると、子供たちは我々をお兄さんと慕ってくれ、一人ひとりと仲良くなれた。秋の慶早戦では、自分の試合の応援にコート再度まで駆けつけてくれた。

【参加者の感想(平成20年卒 中村翔一)】

幼稚舎生の合宿に参加し、自分よりはるかに年下の生徒と一緒にバドミントンをする楽しさ、バドミントンを教えることの難しさを体験できました。幼稚舎生と同じスポーツを通じて心を通わせることが出来たことは大きな経験になりました。また、幼稚舎合宿に参加した後の早慶戦で幼稚舎生が応援に来てくれたことは生涯の思い出になりました。

6. 親子バドミントン教室開催

【概要】

幼稚舎学生とその親御さんがバドミントンを行うことで家族愛を深めるきっかけとしたい、また、お子さんを応援する気持ちが強まるきっかけを作りたい。体育会バドミントン部は、そのための活動の場を提供し、プレーを通じて活動のサポートをしています。

【参加者】

慶應義塾幼稚舎バドミントン部生徒
慶應義塾幼稚舎バドミントン部顧問 武田 敏伸
慶應義塾体育会バドミントン部監督 五月女 季孝
慶應義塾体育会バドミントン部部員及びOB・OG

【開催日】

【第一回】2010年1月31日(日)
【第二回】2011年1月30日(日)
【第三回】2012年1月29日(日)
いずれも於：慶應義塾大学日吉記念館

平成24年卒 佐保田恵

親子バドミントン教室に、幼稚舎の部員や親御さんと一緒に現役部員も参加致しました。



写真上：佐保田恵

「親子でバドミントンを行う」ということもあって“馬跳び”や“鬼ごっこ”といったウォーミングアップから“親子VS大学生”といった試合を行い、日頃の練習とは異なる親子バドミントン教室ならではの場面が数多くありました。参加した現役部員が楽しめたことはもちろん、幼稚舎の部員や親御さんから「楽しかった」、「この親子バドミントン教室をきっかけにバドミントンを始めました!」といった感想もいただき、とても嬉しく思いました。この活動をきっかけに更に体育会バドミントン部と幼稚舎バドミントン部との繋がりがより強いものになればと思います。

現役3年 梶原章宏

「バドミントンを楽しもう!」をテーマに、ウォーミングアップにはじまり、ストレッチ、ショット練習、最後にダブルスのゲームをしました。親御さんからは「こうして、バドミントンの上手な大学生の皆さんが子供の相手をしていただき、そのうえ親の運動不足解消の場も提供して下さるなんて、本当に感謝しています」「これからもぜひ続けていただけたら子どもたちも喜ぶと思います」という嬉しい感想をいただきました。小学生を相手にバドミントンの指導をするという体験はこれまでもしたことがなく、戸惑う部分もありましたが、生徒さん、親御さん、先生方みなさんが楽しそうにプレーする姿が見られ、「バドミントンを楽しもう!」というテーマに沿ったバドミントン教室になれたかなと感じています。

【武田先生から】

五月女監督をはじめ、部員の方々に大変お世話になりました。特に部員の方々は期末試験期間という忙しい時期に時間を取って頂き、恐縮しております。この場をお借りして御礼申し上げます。

今の時期は週に1回、正味40分の活動時間でコート2面。部員12名は打ちたくて仕方がない状況にもかかわらず、いつも満身にシャトルを打たすことができず。また打ち合っても中々ラリーが続かない状態ですので、当日は思い切り打たせて頂き、本当に楽しそうでした。時間を追う毎に、目に見えるように上達していく子どもたちを見ていると、私も嬉しくなりました。本日、学校で子どもたちに会うと、異口同音に「肩が痛い」「腕が痛い」と申しておりましたが、「とても楽しかった」と全員が言っておりました。

当日は6年生のみの参加となりました。中等部にバドミントン部がないので、多くの6年生部員にとってはバドミントン生活もあと1ヶ月強となりました。子どもたちにとって最後の試合である東京都私学個人戦(ダブルス)が2月後半に行われますが、本年度は学校行事のため不参加となります。今年のメンバーと他校の力を考えると、上手くするとベスト3に2チームが入れるかもしれないのに残念です。先週末に決まったことなので、不参加の件は今週のクラブで話そうと思っています。そういうことで、当日の「親子バドミントン教室」が幼稚舎生にとって最後のイベントとなりました。いい思い出になったと思います。本当にお忙しい中、誠にありがとうございました。

7-2. エピソード紹介<新しい取り組み事例>

ここ10年では、バドミントンの練習以外の活動にも精力的に取り組むようになりました。ここでは、その中でも代表的だった取り組みについて紹介します。

1. セキバー杯

【感想】(平成19年卒 広田 崇)

従来からの新年会の形式では大学関係者だけが身内だけで楽しむ形式をとっていた。もっと付属高校の学生と親しみながらバドミントンをし、大学バドミントン部に対して抱えている恐怖心に近い感情を少しでも払拭してバドミントンをするのは出来ないかと、考え、セキバー杯と銘打った企画を提案した。形式は、幼稚舎生から中学、高校、大学、そして卒業生までを含めたバドミントンの場とした。

開催にあたって、どのような形式で執り行うかなど、ほとんど監督から任せていただいたこともあり、自分たちの思いを存分に汲み入れたものとなりました。たとえばどうやって対戦すると盛り上がるか、とか、試合の取り組みからアップ、そして食事、懇親会会場をどこにするかなど、開催する会場の設営にいたる細部に亘ってまで吉永君とともに綿密に打ち合わせをして臨みました。

将来的には、たとえば愛好会でプレーしている人を交えてプレーするとか、慶應付属高校生の中で選手権大会をするとか、愛好会との関係もよくし、慶應内での競技力の向上もさせていきたいという思いはありましたが、まずは様子見ということで本企画のみの実行となった。今後も慶應には付属校があるというメリットを活かせる企画や実行などをセキバー杯にとどまらず実行してほしい。

【参加した当時の感想】(平成23年卒 石川陽菜)

関場杯には高校2年の時に、女子高バドミントン部として初めて参加させていただきました。初めて参加した時は、まだバドミントンを初めて1年もたっていない状態で、また初めてお会いする方ばかりで、周りの方に迷惑をかけてしまうという思いが先行していました。それでも先輩方には親切にいただき、また先輩方のプレーに見入っているうちに、いつの間にか緊張は帆プレ、とても楽しく過ごすことが出来ました。それから毎年参加していますが、年に一度年初めに、幼稚舎生からOB・OGの先輩方まで総勢約100名が一堂に会することは、慶應の縦のつながりを実感することもでき、またそれぞれの方面で活動している方の存在を受けて、自分自身へ喝を入れるきっかけにもなり、何度経験しても、とても貴重な経験となっています。

【参加した当時の感想(平成23年卒 船矢竜太)】

「楽しい！」

初めて参加したセキバー杯で感じたことです。大学生のお兄さん・お姉さん、風格ある大学OBの方々、かわいらしい幼稚舎生、そして、男子高校生として非常に気にかかる存在であった女子高校生らと、一緒にバドミントンができ、非常に有意義な時間でした。バドミントンの技術を向上させることもできるし、女性とムフな気分が羽根を打ち合える、何よりもバドミントンを楽しむことができる。高校生の時は、セキバー杯をそう考えていました。

しかし、大学生になりセキバー杯の本当の魅力は、「慶應の縦のつながりを実感できる」ことだと思ふようになりました。付属校を併設している大学は多くありますが、付属の小学生から大学OBまで、みんなと一緒に行事をやるところはほとんどありません。いろんな年代の人と交流できる、みんなで楽しくバドミントンができる、というのがセキバー杯の魅力だと思います。

後輩たちには是非ともこの素晴らしい行事に参加してほしい、と願っている所存であります。

2. 下級生復唱制度の廃止

【経緯と思い(平成23年卒 真栄城 優)】

私は下級生の時から復唱という制度に大きな疑問を抱いてきた。

その理由として

- 1.主将が一度伝えた内容を繰り返し、言うことの労力に無駄を感じた
 - 2.タイムキーパーの役割に集中しすぎて復唱の下級生が練習に集中できない
 - 3.復唱をミスしたら罰則というのは下級生に緊張感与えてミスを抑制しようというシステムに思われるが、それは場当たり的で本質的な下級生の意識改善にはならないと思った(ちなみに自分が主将になる1.2年前から既に罰則はあまり出ない様にはなっていた)
- 以上の理由が挙げられる。

しかし私は今振り返ってみてより根本的な想いをもち、この復唱廃止に臨んだと思う。その想いとは「トップダウンからボトムアップ体制への移行」である。復唱というのは今、考えると一年生の貢献の上に積み上がった全体最適がとれたシステムでももちろん良い面もあった。しかし、それは上級生が絶対的な権力を持ってチームを掌握している状態という前提があってこそ機能する制度だと思った。私は下級生の時から「慶應バドミントン部は最上級生の決定で一方的に動く上位下達のチームではないか」ということを常々感じてきた。練習内容も最上級生と監督の間で全てがきっちり用意されてその遂行のために一年生は自らの練習を多少犠牲にしてまで行動するというチーム体制である。

この体制の問題点として

- 1.上級生と下級生のバドミントンの実力が逆転状態にある時、下級生からの協力を求めにくくなる。
 - 2.最上級生以外は最上級生になるまで「最上級生から与えられる側」にいただけである。
- などが挙げられる。

私はこの様な体制から「下級生も自律的にチームのことを考えて動けるチーム」への移行を目指していた。

また、その中でリーダーとして下級生に権力を使い指示を徹底させるよりもまず、自らが行動してその中で支持を集めるのがこの体制に合ったリーダーだと考えた。それゆえに復唱制度も上記の考えに沿って廃止しようと決断した。

廃止した当時は色々中途半端な状態であった。

タイムキーパーなどは決めていたものの復唱がないと途中で練習が滞ってしまったり、主将の指示が全員に伝わってなかったりなど、その後の制度が曖昧であった。また上記で述べた「自ら行動で示す」ということも当初は自らの容量不足でとても実行できていた様には思えず、ボトムアップに移行する

過渡期の中で中々、形を作れずにいた。それがリーグ戦での結果の一つの要因かもしれないと思っている。

しかしそれでも秋リーグに向う過程でチームの体制は出来、下級生も以前程与えられるだけでなく自らが自律的に動いていると実感できる様になったと思う。

そしてその体制は山口哲生主将を経て現在の川口太希主将に受け継がれていると実感する。

完全なトップダウンではなく下級生とのやりとりの中からチームを運営して行く体制は着実に育っていると実感できる。確かに私の時は色々制度を変え困惑し、それがリーグ戦での結果にも影響してしまったが、この移行は遅かれ早かれ必然であつと思う。それは他のチームや集団を見ても実感出来る。

復唱廃止というのはまさにこの様な移行の中の代表的なこととして捉えることができる。

7-2. エピソード紹介<活動範囲の拡大>

ここ10年では、バドミントンの練習以外の活動にも精力的に取り組むようになりました。ここでは、その中でも代表的だった取り組みについて紹介します。

3. ホームページ刷新

【概要】

部の情報を外部に発信したい。伝統を引き継ぎながら、チームの魅力伝えたい。体育会バドミントン部は、学生自らが、様々な人を対象に情報発信を新しくしました。

平成21年卒 山口 悦伺

【背景】

入部の当初の部のホームページは、体育会他部やサークルのホームページと比較するとやや「内向き」で、当時新入部員であった私の目から見て魅力に欠けていた。そこで、現役部員以外の人(新入生、OBの皆様、社会人など外部の方)にも体育会バドミントン部の魅力を感じてもらいたい!という想いで工夫改善を加えた。

【工夫点1】

作成時に特に大切にした点は、過去の記録や掲示板などの伝統的なものは残しながら、「日常風景写真館」や「トップページの写真」などの写真を多くして部の雰囲気や伝わるような工夫をした点です。

【工夫点2】

今のホームページは時折拝見しますが、定期的な更新と共に、「OB時代の写真」の掲載や「毎月のスケジュールのレイアウトの変更」など、様々な改善をしてもらっており大変良いことだと感じております。今後は、内向きの情報蓄積と同時に、「どうしたらよりバドミントン部が魅力的な組織に見えるか」という観点で、既存の枠(今のホームページ)に囚われず改善していただきたいと思っております。そのため、例えば今のホームページの形でなくなっても構わないと思っております。

個人的には、OBよりも新入生や外部の方々を目を向けてやっていただければと思います。話が前後しますが、そういう意味ではこの度の震災後の合宿について、ホームページから発信をされたことは非常に誇らしく感じております。これからもバドミントンの力をつけるとともに、こういった活動を継続していきましょう。

【工夫点3】部員リレー日記

平成21年卒 前田 賢志

私が部員日記というコンテンツに込めた想いは2点あります。

1点目は、OB・OGの皆さん、保護者の皆さん、部員の皆さんを始めとする慶應義塾体育会バドミントン部のホームページをのぞいてくれた全ての人たちに、我が部がどのような活動をしているのか、学生目線の臨場感あふれる「今」を知ってもらいたいという想いです。こうした「今」を発信することで、部活に興味を持っている学生たち、部員の保護者の皆様、なかなか日吉に顔を出すことができないOB・OGの皆様との交流が図れるのではないかと考えました。2点目は、部員たちがどのように考え成長してきたか、「軌跡」として形に残したいという想いです。自身が部活を卒業した後、4年間書きためた日記を見返してみると、自分がどのような壁にぶち当たり、何を考え、どのようにして乗り越えてきたのか知ることができます。それは自身にとって大きな自信にもなることでしょう。

現在のホームページは、私が広報の時と比較し、コンテンツもより充実しています。より先の予定が把握しやすいgoogleカレンダーの導入や、日常風景写真の充実は、とても面白い試みだと思いました。OB・OGの皆さん、保護者の皆さん、学生さんも日吉に来てみたいという気持ちになるのではないのでしょうか?ホームページを通して、もっともっと交流が進めばいいなあと思います!

平成24年卒 柳原秀

2年生の時から2年間HP管理に携わってきた感想としては、この役職に求められるのはコンピュータやネットワークの深い知識よりも、「我が部の魅力をいかにして伝えるか」を常に考え実行することだと感じました。

そのためにまず、高い更新頻度を保つことを心がけてきました。更新を怠ると一度訪れた人でも興味を持たなくなり、プレーだけでなくこういった仕事も手を抜かないというのが我が部の在り方だと思います。それだけではなく、言葉使いや載せるべきでない情報など気を付けないといけない部分が多々あり、役職に就いた当初は監督や先輩に色々注意を受けました。この役職を通じて自らの選択、文章、行動を客観的に見る機会が多く、様々なことを学ばせていただきました。

また昨年には日常風景写真館を大幅に更新し、創部当初の懐かしい写真を多く掲載しました。大学バドミントン界で最も深い歴史を持つ我が部の魅力が伝わると嬉しい限りです。なお、この件に関してはS36年卒の高井先輩には写真のご提供、アドバイスなど多大なご協力を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。最後になりますが、やはり記念館で直に練習を見てもらうのに比べて、HPで我が部の魅力を伝えるのは難しいところがあります。しかし、HPは外部の方々に広く我が部をアピールできる重要なツールなので、これからHPを担当する後輩には文章、写真など限られた手段の中で試行錯誤して魅力あふれるHPを創り上げていくことを期待しています。



7-2. エピソード紹介<早慶戦エピソード>

伝統の早慶戦では、完敗を喫し、一矢報いる、の繰り返しとなっている近年ですが、早慶戦においても、いくつかエピソードがありましたので、ここに紹介いたします。

1. 意識改革

【早稲田饅頭(平成21年卒 光井 翔)】

早慶戦の前日に行われた結団式において、我々は「早稲田を食う」をなぞらえて買って来た早稲田饅頭を食べた。すべては早稲田を倒すという気持ちをメンバー全体で共有し、その意識を高めるためである。

この饅頭自体が重要な行いではないことは明白であるが、このように、早稲田を食うという意識を常に持ち続けられているかどうかが早稲田に近づくために必要である。

現役諸君には、前日に饅頭を食べたというそのときの思いを365日忘れることなく、そして早稲田に負けたという気持ちを常に忘れずに練習に励んでいって欲しい。



早稲田饅頭(写真上)

【アップ中止の背景(平成22年卒 渋谷 康太)】

従来の全員で大声を出して、規律を持って走るアップは、試合に向けて、チーム全体の士気を高めるという意味合いが強いと感じたが、一方で、肝心の試合に対して、メンバーのコンディションを最善に持っていかけているかという疑問が感じられていた。ここ数年早稲田に対して水をあげられている状況を鑑み、本気で早稲田に勝つという行動になっているのか、それを現役部員皆で話し合い、アップの形式をメンバーそれぞれに委ねる方式を採用した。結果的に、私個人でいえば、時間間隔があいて、不定期で試合が組まれる早慶戦において、ベストなコンディショニングで試合に臨めたと感じている。試合では、最後に早稲田主将の松浦君に敗北しましたが、現役諸君には、アップの改善などをひきずらず、常に早稲田に対してベストパフォーマンスを取るにはどうしたらよいか、そしてまた試合前に、相手に自分は勝てると思える精神状態で望めているかということを念頭において、四年間を過ごして行って欲しい。



早慶戦アップ写真(先頭左:須賀亮太(1年)、右:光井翔(4年))

2. 主将戦ダブルス

【感想(平成19年卒 広田 崇)】

私が主将を務めた平成18年度、早慶戦での主将戦をダブルスで行ったが、これには私の思いがある。

私が知る限り、最後の試合は主将のシングルスしか経験したことがなく、それに倣うものだと認識していたが、監督の話によれば、近年はそうであって、昔はそうではなかったらしい。

四年間に亘りずっとペアを組み続けてきた同期の小池君が最後の秋リーグを前に腰を怪我し、一緒に最後のコートに立てなかったことが私は悔しくてならなかった。二人の力を合わせればきっと勝っていたはずだということを考えなかったといえば嘘になる。彼が苦しんだように私も苦しんだ。そこで、私は、彼と二人で早慶戦の最後の試合をダブルスで行いたいという意思を当時の早稲田大学の主将の菅野君へ申し出て、ダブルスで挑むこととした。

当日は、シングルスでも菅野君に挑んだが、3年連続で彼の前に敗れてしまい、小池君も相手副将の酒井君に敗れてしまった。菅野君・酒井君のダブルスは、東日本選手権でベスト8、そして全日本学生でも上位に入るなど、相手としては格上だったことは明白だったが、最後のダブルスコそはと、みんなの応援を背に、小池君とともに試合に臨んだ。

私も小池君もレシーブは苦手で、守るよりは攻めるスタイルだった。小池君が後衛、私が前衛というパターンを決めパターンとしていたこともあり、この試合でも私が前でシャトルを捌き、あがったシャトルを小池君が後ろでスマッシュを打つという展開になっていった。

しかし、力の差を見せ付けられるようにレシーブから崩され、逆にスマッシュを何本も決められていった。相手のスコアが21点に近づくにつれて、もう終わってしまうのかと、まだプレーが終わりたくない、という不思議な感情がこみあげてきていた。つなげるシャトルがつなげず、決まったと思うシャトルを拾われ、長く感じた時間とは裏腹に2セットであつという間に完敗した。

最後にわがままを言って、主将戦でシングルスではなく、ダブルスを行ったことには申し訳なさを感じているが、最後の最後に小池君とともに戦えたことは四年間での最後の思い出として今なお記憶に残っている。

私はプレーを継続する一方、小池君はプレーを退き、一緒に血の滾るようなゲームをすることはもう出来ないが、今後はよき友として、当時の話やいまの生活を酒の肴に飲み交わす仲でありたい。



左から小池、広田、小粥

7-2. エピソード紹介<苦難>

10年間では、部として苦しい場面や、当たり前だったことができなくなる、当たり前だった練習環境の変更を迫られるという状況もありました。

1. 5人で2部練習

【感想(平成19年卒 小粥 貴善)】

吉岡さん、松下さん、坂根(洋)さん、広田、小粥の5人で千葉県の富津で春合宿を行った。当時、レギュラーの半数ほどを占めていた四年生が抜けたため、人数や戦力が大幅に減ってしまっており、全員が強くなければならなかった状況にあった。このため、春休みの練習期間は、午前・午後の2部練習を取り入れて負荷の重い練習が続いた。私は大学初めということもあって、コート内を動く練習は他のメンバーよりも少なかったが、コート外のトレーニングや鬼コーチ(?)の叱咤激励もあって、体力的精神的に辛かった。辛かったが、私はこの時期が一番実力を伸ばせてもらえたと思う。自主的な練習などどうしても甘えが出てしまうことは、教訓として私の中に今でも刻まれている。当時は、五月女監督、茂木コーチ、巽コーチ、立田コーチ、川野コーチが足しげく練習にいらっしやってくれており、合宿にも参加していただいた。現役の人数が少なかったため、コーチの方々フルタイムで打つという練習環境であった。練習のみならず同じ宿に止まり、家族並みの絆のチームだった。あ春合宿の厳しくも楽しかった経験は、かけがえのない思い出である。

【感想(平成18年卒 坂根 洋介)】

平成15年の慶早戦で四年生が引退したあと、平成16年の春休みに部員は5人でした。まさに、塾バドミントン部創設以来の未曾有の危機的状況といえたでしょう。吉岡主将、松下副賞のお二人は、リーグも経験していましたが、残りの三人は二人との差が大きい状況にありました。そのような状況を踏まえ、春休みの練習は、毎日二部練となり、きねんかんとコート外トレーニングを行うことになりました。ほぼ一日練習するような形にするという話があったとき、当時は自分自身からだもつのかという不安がありました。当時を思い返すと、上級生の就活の時期も重なり、トレーニングを1つ下の広田、小粥の三人でやったりもしていたことが思い出されます。

トレーニング担当という役割をいただき、過去やっていたという多摩川までの往復ランニングもやりました。春休み前半では二週間で百キロ近く走ったかと思えます。

また、その年は合宿を外でやることを復活させた年でした。盛況で合宿できるところを探し、千葉の富津で合宿を行い、つきっきりでコーチをしていただいた茂木コーチをはじめ、たくさんOBの方々に練習や差し入れを頂いたことを覚えています。その年の四月、久々に多くの進入部員を迎えることが出来ました。5人しか部員がいないという状況は色々不便が多かったと思います。ただ、その中で後に続けられる変化があったと思います。忝奈少ない人数でやることはもうないと思えず、そうならないことを祈るところですが、そんな時期があったことは、OB・OGの皆様や現役の心に少しでもとどめていただければと思います。



左から小粥、広田、松下、吉岡、坂根洋

【感想(平成19年卒 広田 崇)】

当時は人数が5人しかいない状態で、リーグのことを考えると、吉岡さん、松下さんの二人で勝つということしか選択肢として考えられないような状態だった。

そこで春においては、二部練習を敢行し、ボトムアップをスローガンとして練習に取り組んだ。トレーニングや練習では、常に先輩がたからの厳しい監視があり、手を抜くことなど言語道断という状態だった。特にOBの茂木コーチがくる日などは、朝アップをしている頃にその姿が見えた瞬間に、今日一日がおおつたと感じるくらいに、厳しい毎日だった。(それ以上に当時自分は腑抜けていた)

合宿では、茂木コーチが全メニューを考案し、つきっきりで指導してくれた。このとき、この人は実はいい人なんじゃないかと思った。しかし、合宿の練習が終了し、体育館をあとにするとき、じゃあ今からトレーニングだといって、さんざんスクワットをさせたあのかのときの、茂木さんのひどい仕打ちさといったらと、やっぱり逆恨みしていた。宿舎では、よなよな一人で練習メニューを組んでくれていたことを知った。やっぱりいい人だと思った私は単純だった。その次の日の練習では、やっぱり体育館での練習が終わってからトレーニングだった。そこは想定していたので、あまった(あまらせておいた)体力でうまく乗り切ったが、次は、ラケバをクルマに入れると。いわれるままにラケバをクルマにのせると、じゃあなと。

ん?と思ったが、俺は先にクルマで宿舎に帰るから、お前ら走ってこい。この人まじかよと思ったが、やっぱりまじらしい。さんざんいい人だと思わせて裏切られた感じがして、それでもいい人だったんじゃないのかと、様々な思いを交錯させてとにかく走った。びりだと夕飯抜きだといわれたこともあり、本気で走った。結果、同期の小粥をビリにすることが出来、自分は助かった。

夕飯では、残すと怒られた。嫌いなものも食べ。すべてがトレーニングだったというか、すべてが茂木さんマターだった。朝は海に向かって、日吉に帰りたいと叫んだところ、後ろから蹴り飛ばされて、ダッシュさせられた。やんちゃだったなと当時の自分を振り返り、今もそのやんちゃさは忘れないようにしようと思つと一人つぶやく次第である。

【感想(平成19年卒 小池 徹)】

広田・小池は強くうまくも仲もよくないダブルスだった。つまりいいところがほとんどなかった。ダブルスはめっちゃくちゃだった。しかし、ダブルスを組んで2年が経過してようやくお互いをプレー面でも理解しあえるようになり、また最上級生になってより深い絆が芽生え、僕らのダブルスは急成長した。

そしてどのペアにも負けない強みも出来た。それは勢いだ。どの試合もまるでお祭り、リーグ戦のように戦った。僕らは吠えて吠えて吠えまくった。弱いダブルスだったが、広田と組んだダブルスは本当に楽しかった。広田もきっと、楽しかったと思っている。広田とのダブルスは僕の人間としての成長記録そのものだったし、僕の部活動生活を象徴していたともいえる。現役生活最後の試合を、ダブルスで飾られて良かったと思っている。

7-2. エピソード紹介<苦難>

10年間では、部として苦しい場面や、当たり前だったことができなくなる、当たり前だった練習環境の変更を迫られるという状況もありました。

2. 記念館補修

【記 平成23年卒 石川陽菜】

蝮谷体育館完成・記念館耐震工事について

2009年度、慶應義塾大学創立150年記念事業の一環として、日吉キャンパスにて記念館の耐震工事と蝮谷体育館の建設が行われた。蝮谷体育館については、工事開始直後に、太平洋戦争時に帝国海軍の中核機能が置かれた日吉台地下壕の入口3箇所の遺構が発見され、これを出来る限り保存するため建物の位置を移動するなどの設計変更と発掘調査等を行うこととなり、一時工事が中断されたが、2009年11月に約1年の工事期間を経て完成した。

同月中旬には、清家塾長をはじめとする義塾関係者、設計・施工関係者、蝮谷体育館を使用する我が部を含めた4部の体育会部員が出席し、竣工式が行われた。

蝮谷体育館は、高等学校の体育教育環境並びに体育会器械体操部の練習環境の確保が主要目的であったが、我が部も記念館耐震工事が終了するまでの期間と、その後で記念館が利用出来ない場合に、使用させてもらうこととなった。

そのため、我が部も蝮谷体育館で活動しやすいよう設備を整えてもらった。蝮谷体育館の壁が白系統であったことから、プレーの際に支障がないよう、緑色のネットを設置できるようにしてもらったことも、その1つである。さらに、実際に体育館を使う中で、何か問題点がないか、工事関係者・体育会事務室関係者・現役部員によって幾度か検討も行われ、蝮谷体育館での練習環境が確保された。

一方、2009年11月より約半年間、記念館の耐震工事も行われた。

終了直前期には、記念館の使用に際して不具合がないか、工事関係者と小杉会長・現役部員で下見を行った。

また終了後は、蝮谷体育館の完成に伴い、それまで記念館の北側フロアを使用していた器械体操部が蝮谷体育館に移ったことで、男子バレーボール部と一緒に中央フロアを使っていたところが、我が部が北側のフロアを終日使えるようになった。

さらに中央フロアも、バドミントンコートが設けられるようになった。耐震工事以前は、北側フロアも使用できるようにはなっていたが、器械体操部の使用により、床が滑りやすくなるという難点があった。しかし、耐震工事によって床もすべて改修されたことで問題点は解決し、中央・北側フロア合わせて8面の確保が可能になった。

以上のように、蝮谷体育館での練習場所に加え、記念館での練習もより良い環境の元でおこなえるようになったため、合宿や練習の幅が広がり、バドミントン部の活動の機会が広がった。



日吉記念館：外観(左上)、内観(右下)

3. 震災によるリーグ中止

70周年部誌寄稿文 東日本大震災に伴って

平成24年卒 山口 哲生

2011年3月11日、日本は空前の大震災に見舞われた。東北地方には津波が押し寄せ、多くの犠牲者を出し、首都圏でも停電、断水など一時大混乱となった。

東日本大震災と名付けられたこの震災は、各方面に様々な影響を与えた。我々慶應義塾体育会バドミントン部も例外ではない。この年、戦後初の関東バドミントン春季リーグ戦の中止が決まったのだ。

震災が起こって2日後、日吉記念館は安全確認等のために使用禁止となり、体育会全ての部の活動禁止が体育会事務室により言い渡された。放射能被害の恐怖が報道や噂で広がっていき、実家に一時帰省をする部員も多く、春季リーグ戦に向かっていて我がチームは停滞を余儀なくされた。

練習は10日ほど経ってから再開することが出来たが、体育会事務室からは活動時間の制限や活動の詳細についての報告など、様々な制約を受け、思い通りには練習は出来なかった。放射能、計画停電など、普段ではありえなかった不安を抱えつつも、再び春季リーグ戦に向けてチームを動かしていった。

しかし、3月終わりのある日、関東学生バドミントン連盟から春季リーグ戦の中止の連絡が入った。多くの大学で体育館の使用が制限されており会場が確保出来ないこと、直接被害を受けた大学は参加が難しいこと等が理由だった。どうしようもないことだと理解しようとはしたが、自分の中で整理がなかなかつけれなかった。この年掲げていた「春季リーグ戦5部優勝4部昇格、秋季リーグ戦4部優勝3部昇格」という目標は、達成するチャンスを奪われてしまったのである。五月女監督や手塚コーチと話し合い、泣いて悔しさをぶつけたことはこの先忘れないだろう。

また、震災に伴い、部を挙げて微力ではあるが復興活動を行った。この年合宿を行った茨城県ひたちなか市への義援金を集め、部のホームページに茨城県支援のページを開設した。個人的に被災地にボランティアに行った部員もいた。

その後、リーグ戦中止の悔しさをばねに、「秋季リーグ戦5部優勝、4部昇格」を何が何でも必ず達成すべく練習に取り組んだ結果、4部昇格を果たすことが出来た。バドミントンが出来る、という環境は決して当たり前のものではないことを、私たちは震災から学んだ。昇格を果たした一因に、部員一人ひとりにバドミントンが出来る環境への感謝が大きくなったことが挙げられるだろう。



蝮谷体育館：外観(左上)、内観(右下)

7-2. エピソード紹介<国際化～海外留学～>

ここ10年では、国際化の波がバドミントン部においても現れるようになりました。バドミントン部から海外留学した森本君がアメリカへ留学。そして、他国から慶應義塾大学へ留学生として学びに来た学生もいました。ここでは留学生からの慶應塾体育会バドミントン部へのメッセージを掲載します。

1. 海外留学生からの寄稿

エイドリアン

エイドリアン(2006年～2007年在籍:メルボルン大学)
半年だけでしたが、慶應義塾大学に留学した頃の思い出の中で、バドミントン部に入ったことは最も良い思い出の一つです。以前からオーストラリアの大学でバドミントンをやっていましたが、慶應の練習は正直言って「僕にとってはちょっとまじめ過ぎるかな」と思いました。しかし、皆と一緒に練習すればするほど、慶應バドミントン部の皆で「ファイト」という気持ちがだんだん分かった気がしました。また、部の一年生たちからOB・OGの方に至るまで仲が良く、日本語のあまり出来ない留学生の私も、いろいろお世話になりました。慶應バドミントン部のことは、良い思い出としていつも忘れず覚えています。半年間参加させていただき感謝しています。これからも宜しく願います。

カール

まずは一年間一緒に練習させていただいてありがとうございます。去年10月のはじめに慶應バドミントン部の練習に始めて行った日を今でも覚えています。9月に日本に来てから一ヶ月半ぶりのバドミントン。ドキドキしながら記念館に入ったところ、部員達から誰だろう?って戸惑い視線を浴びられた(笑)けど、それからすぐ部員のみならず仲良くなるのが出来て一年間楽しい時間を過ごしました。



写真上:カール
(元香港ジュニアナショナルメンバー)

駒場に住んでいて三田キャンパスに通いながら日吉まで練習に行くという生活はさすがに疲れるけど、練習が楽しくて毎回新鮮なことを勉強できてよかったと思います。また練習以外でもみんなと食事したり飲み会したりとても楽しかったです。バドミントン以外お酒も鍛えて帰ることができました(笑)あつという間に一年過ぎましたが、また日本に来て部員やOBのみなさんと会えたらと思います。香港にも遊びに来てください。飲みに連れて行きます!

森本修介(平成22年卒)

私は大学時代にUCI,大学院時代にPURDUEと2度留学する機会に恵まれました。特に最初の留学ではレギュラーであったこともあり、周囲に申し訳ない気持ちもありました。思い切って五月女監督に相談すると快く留学を認めてくださり、逆に励まされたのです。「体育会のレギュラーが留学するなんて」という反対も覚悟の上での相談でしたので、驚くと同時に頑張らなくてとは感じました。それから必死で部活と留学試験の準備に取り組みました。我が体育会バドミントン部は、それぞれのやりたいことを尊重し、人間として成長させてくれる素晴らしい部だと思えます。留学を実現する上で、お世話になった多くの方々にご場をお借りして感謝し、最後に私の好きなマークトゥエインの言葉を記します。

“Twenty years from now you will be more disappointed by the things that you didn’t do than by the ones you did do. Sail away from the safe harbor. Explore. Dream. Discover.”-Mark Twain

オリビエ

バドミントン体育会

Gervais(ジェルヴェ) Olivier(オリビエ)

まず最初に言いたいことは入部分してから分からないことを一つ一つ教えていただき、本当にありがとうございます。いつも世話していただいて、心から感謝します。



写真上:オリビエ(フランス)

<部活の雰囲気>

皆にとって当然かもしれませんが、チームの組織、つまり先輩と後輩の関係をいわゆる“team spirit”の基礎として大切にしなければなりません。皆は個人的に先輩の言うことに従って練習に取り組みますので、グループ全体にとってもいい影響を与えたいと思います。欧米とは比べられないほど、皆の積極的な参加が感じられます。声を出すことが真剣に練習に励む気持ちとあいまって、最高の雰囲気ができます。

<練習のやり方>

九月に初めて部活に行ってみて、私が思ったよりもスタミナ、体力、技能などが上達するように非常に厳しい練習が行われて、その練習は知らないうちに私の潜在力を高めました。パターン練とタッチクリアの優れたコンビを見れば分かるように、目標を達成するために練習の全てがよく考えられていたと思います。

しかし、私の考えでは、その新しく作った潜在力を最大限に活かすのに、練習だけでは十分ではないと思います。何が重要なかと言うと、ゲームを単純に行うのではなく、皆でゲームの作戦をもっと詳しく検討し、分析してゲームを行うことです。例えば、具体的にはシングルスを考えれば、相手がヘアピンを打って自分がクロスコートのあまり高くないシャトルを返せばどうなるか、ということ意識しなければ、その次に絶対に取れないスマッシュを受けてしまう可能性が非常に高いことに気がつかないでしょう。ダブルスでも多くの大事なことをよく考えなくてはなりません。アタックをする方が一般的に勝つと言うだけではなく、相手のアタックを受けて、こちらのアタックにつなげるためにドロップやヘアピンがいかにか大事なのか、というようなことを特に一年生に伝えることが重要だと強く信じます。その上、自分のパートナーを知るために、時々パートナーを対戦相手にしてその弱点を見つけるようにゲームをやることも皆の上達のために意識した方がいいと思います。更に、先輩がいい作戦を発表するのを待つより自分たち自身で考え、それを皆に話すことで、皆で更に深く考えることができ、効果が大きいと思います。

要するに、今と同じ雰囲気でもう少し今私が言ったようにゲームを行うことによって練習で得た潜在力を発揮させるということです。

最後に、英語の諺なのですが、しっかり覚えてほしいと思います。“The only failure is to give up trying.” 早慶戦、秋リーグに向けて全員で頑張ってください!

私は絶対にまた日本に来ますので、これからも宜しく願います。

7-4. 熱海・法悦の思い出

本塾バドミントン部OBの徳用佳夫先輩(昭和30年卒)は、自らが熱海にて経営されている旅館法悦に競技生活を引退した4年生を毎年招待してくださっています。ここでは、過去10年間の卒業生たちに法悦への感謝の気持ちを綴ってもらいました。

石川陽菜(平成23年卒)

毎年行われる卒業生の慰安旅行として、12月に昭和30年卒の徳用先輩がご経営される法悦旅館にご招待いただきました。同期で熱海観光をした後は、例年の慰安旅行の定番となっている、宴会を行ってから、花火・カラオケ・ラーメンを堪能し、その後は先輩方と朝まで語り明かしました。

五月女監督を初め、四年間お世話になった先輩方と様々な話をし、四年間を振り返ることともに、当時の辛かったこと、今だから言えること等、暴露話も飛び交い、短時間ではありましたが、とても濃く、楽しい時間を過ごすことができました。

野村和秀(平成24年卒)

熱海の温泉と食事を満喫できて、楽しいひとときでした。また、4年間の思い出話、暴露話を朝まで部屋で語り合ったあの夜のことは良い思い出です。ご招待いただき、本当にありがとうございました。

坂根宏志(平成20年卒)

部活を引退し、研究室と自宅を往復する毎日の中、徳用先輩の法悦に伺うことを非常に楽しみにしていました。夕食前に入浴した温泉は都会の喧騒を忘れさせてくれるほど疲れを癒し、かつ、ゆったりとした時間が流れました。夕食もおいしいがゆえにお酒も進みました。翌日の二日酔いはひどいものでしたが……。ほかに花火を見たり、カラオケを歌ったりと同期だけでなく、普段とは異なるOB・OGの方々もみられ、四年間の苦難を忘れさせてくれるほど大切なひと時でした。最後にりましたが、改めてこのような機会を設けていただいた徳用先輩には感謝申し上げます。

広田崇(平成19年卒)

部活を引退後、法悦さん(熱海温泉旅館)に招いていただいた。森下前監督、五月女監督をはじめ、お酒を飲み交わしたのはいい思い出である。当時は、なぜ突然旅館に招待してもらえるのか、お金は払わないのか、好意に甘えるだけでよいか、など疑心暗鬼だった。毎年のもので、とほいうものの、あまりに申し訳ないと感じ、お土産を買っていき、お土産を持ってきた学生ははじめてだいわれ、当惑したことが一番の思い出かもしれない。

前田賢志(平成21年卒)

早慶戦を終え、次の題へバトンを渡してホット一息ついたところで、法悦にお招きいただき、すごした一夜は忘れられない。貸切のお風呂ではしゃぎ、おいしいご飯にシャンパンを頂き、特等席で花火を見ることが出来た。夜にはスナックでカラオケ、町でラーメンを食べ、旅館まで坂道ダッシュ！笑
最後は、濃厚だった四年間を振り返り、楽しかったこと、辛かったこと、頑張ったこと、等々朝まで語り明かした。人たちの代らしく?! 法悦で過ごし、楽しい思い出を作れたことに感謝している。

福崎淳一(平成22年卒)

法悦では、現役時代にお世話になった先輩方と優雅な時間を過ごすことが出来ました。カラオケでは高井さんが洋楽を熱唱する姿に心を打たれ、冬の花火大会では、夜空に広がる大きな花火を皆で鑑賞することが出来ました。夜には現役当時の思い出を先輩方と朝まで語り明かし、現役を引退したからこそ話せる話題で盛り上がりました。また最終日には、徳用さんと一緒に熱海を敢行させていただきました。このように法悦では、現役時代には体験できない貴重な時間を過ごすことが出来、良い思い出として心に残っています。



左から森下(昭和54年卒)、前田、光井、山口(ともに平成21年卒)

7-5. ご家族からの寄稿

【手塚純平のお父様より】

純平の最初で最後の試合を観戦・応援できて幸せでした。純平の高校から七年間の集大成が、早慶戦という舞台で、しかも最終戦でみんなが応援している中での試合には大変感動しました。試合後 純平が私のところまで駆け寄ってきたことには驚きと、瞬時に何も言わなくても言いたいことが分かりました。主将という大任もまっとうできたのは、良い仲間にも恵まれたお陰でしょう。この慶應バド部の経験を、今後の長い人生に活かしてくれるものと信じています。また、歴史ある早慶戦を今後もしっかり続けて頂き、近い将来、早稲田を負かす慶應になることを祈念いたします。

【中村翔一のお母様より】

兄の試合を実際に見たのは今回が初めてでした。どんな風に試合をしているのかと、こちらも緊張して見ていたのですが、普段の兄の雰囲気とは違い真剣に部活をしている姿には感慨深いものがありました。パンフレットには「チームの盛り上げ役」といったニュアンスで紹介がされていたように思いますが、部員には声をかけ・ハチマキを締めて・点が入れば（アナウンスが聞こえないほどに）叫び・・・と、こちらから見ていても、チームに気を配っているのがわかりました。実際、家族内でもそういう役割を担うことが多い兄ではあります。同期の方々や後輩から（からかわれるにしても）慕われているようで、妹として嬉しくも思いました。観にあって良かったと思っています。怪我などの理由で何度かバドミントン生活を続けることに反対もしましたが、十年間やり続けてきたという事実がある試合に詰まっていたと思います。結果負けてしまいましたが、兄のバドミントンへの想いは伝わった様な気がします。

【光井翔のお母様より】

『早慶戦によせて』

いつも息子が、大変お世話になりまして、ありがとうございます。拙い主将ぶりではありませんが、彼なりに一生懸命な一年でした。暖かいご指導のお陰で、何とか次にバトンをお渡しすることができたようです。心より御礼申し上げます。今年の現役四年生の締め括りの早慶戦も終了し、いよいよ彼らが現役を引退するところまで来てしまいました。思えば、昨年の早慶戦を初めて観戦させていただいてから、あつという間の一年でした。この一年間、来る日も来る日もただ部活のみに明け暮れる息子に、親として苦言を呈する場面が少なからずあったのも事実です。ただ、一生懸命なんとか強いチームにしたいとの彼の一念は、端でみている私達家族にも伝わってくるものがあり、心の中で祈るように応援しておりました。部員の方々の思いのこもった全ての試合を、観させていただくのを楽しみにしておりましたが、当日はずせない所用のため、馳せ参じた時には、すでに四年生たちのシングルス戦となっておりました。

和栗さん、藤原さん、前田君、山口君、どの試合も、本気がみなぎり最後の試合に相応しい立派なものでした。山口君のシングルス試合は残念ながら相手の方の負傷で、これからという時に終わってしまいました。が、あとで伺ったところによると、渋谷君とのダブルスではなんと早稲田のダブルスを打ち負かしたそうですね。さぞかし盛り上がったことでしょう。

最後の主将戦は、なんとか相手に喰らいつきたいとばかりにシャトルを追いかける息子の姿に、胸が熱くなり祈るような思いで応援しました。きっと周りで声の限り応援してくださいとお願いしたOB・OG、部員のみなさんも同じ思いでいてくださったのではないかと思います。ありがとうございました。お忙しい中お集まりくださった、四年間お世話になったOB、OGの皆様、少しでも喜んでいただきたいとの息子の思いが強かった試合だけに、本人にとっては大変悔しい結果となったようです。ですが、親ばかながら、息子なりに良くやった、良い試合だったよと褒めてやりたいと思います。皆様のお力添えをいただきながら、四年生五名が一人丸となって部を引っ張ってきたこの一年であったと思います。四年生の皆様、本当にご苦労様でした。大会運営に対するお褒めの言葉を早稲田の方からいただいておりましたが、試合に出た人達だけでなく、この日のために部員全員の多くの力が注がれてきたのですね。

この四年間、バドミントン部で貴重な経験をさせていただいた息子は、なんと幸せな日々を送らせていただいたのだろうと今さらながらに思います。ご指導くださった先輩の皆様、ともに切磋琢磨してくださった同輩、後輩の皆様、本当にありがとうございました。最後に私の好きな言葉です。You can't win, but you can try. きっと近いいつの日か、挑戦者ではなく、互角に戦いを挑んで、早稲田に勝利する日が来ることを信じております。

【山口悦伺のお母様より】

『早慶戦を観戦して』

先日は素晴らしい時間をありがとうございました。感想を・・・と言っていただきましたので、送らせていただきます。とはいえ、いまだにいろんな感情がうまくまとまらないので・・・今年、早慶戦は最終学年。この四年間の、中学でバドミントンに出会ってからの十年間の総決算の日に立ち会えたことをまず何よりも幸せに思いました。昨年勝てなかったことをとても悔しく思っていたようなので、今年はなんともしも勝ってほしい、勝たせてやりたいと祈る思いで見えておりました。ダブルスが始まって一進一退の状況にずっとはらはらし通しで、なんとか一セットをとったあともしもリードされる度に「逆転されるんじゃないか」とか「ここまでなんじゃないか」とか不安ばかりが頭をよぎりました。最後の瞬間は実ははっきり覚えていません。

十八点あたりから見るのが怖くてずっと祈っていたように思います。歓声が聞こえてやっと悦伺たちが勝ったのだとわかった瞬間、喜びやら安堵やらで何か叫んだかもしれません(笑)OBの方々もとても喜んでくださったのが嬉しくて、我が子をとても誇らしく思いました。一番最後に一番の姿をみせてくれたことにほんとうに感謝しています。一部と三部の違いとかそういうものは(確かにあるのですが)関係なく力を発揮できるのが早慶戦なのだと思います。早稲田はやっばり強いチームですが、後輩の方々が一一つ積み上げて近づいて行って下さるものと信じてこれからも悦伺と一緒に応援していきます。

これまでの学生生活をバドミントン中心に過ごしてきて、学業との両立や一人暮らしで大変なこともあったでしょうが、それらを乗り越えてやり遂げてくれたことを、我が子ながら立派だと思っています。先生方や先輩方、チームメイトの方々に支えられて充実した四年間を過ごせたことに感謝を忘れず、これからの人生を歩んでいってほしいものです。悦伺がこの四年間で得たものはとても大きいのですが、同時に親もたくさんの思い出と喜びをいただいたように思います。最近急に大人になった我が子を見るにつけ、こままでご指導いただいたことに心から感謝しております。ほんとうにありがとうございました。

【前田賢志のお父様より】

『早慶戦を終えて～御礼』

日ごろより息子の部活動に対し、監督あるいはOBというお立場で、熱心なご指導、ご助言等頂き大変ありがとうございます。秋の訪れを感じるこの季節に、私は、息子の一、二年そして四年の合計三回早慶戦の観戦機会に恵まれました。先輩がたが築きあげた歴史と伝統ある舞台で現役世代がのびのびと動き、集中力と勝負へのこだわりをもった必死の姿に毎回感動を頂きました。じりじりと開くスコアは一体何が原因なのか。プレーヤーのどこが違うのか。練習の仕方や内容、体調の仕上げ方に課題があるのか。普段の息子の生活状況も思い浮かべながら素人なりにそんなことを考えたりもしました。

息子にとっては、今年も悔しさが残る試合だったのだろうと試合明けの今日声をかけてみました。スコア差に関わらず自分らしい試合だったとの回答でした。故障箇所があることも分かっていたし、スポーツ選手には致命的な体の硬さということも大きな壁でした。しかし、塾高以来七年間で経験ゼロがあそこまでプレーできるようになったのだから大したものだと感じています。好きであること、熱中できること、続けることが成長の糧の一つとなったのでしょう。共に歩んできた同期の光井、山口君そして女性陣にも感謝の気持ちでいっぱいです。

7-5. ご家族からの寄稿

息子は羨ましいほど良い経験を重ねたと
思っています。慶應義塾特有の先輩方との
接点はその典型です。多くのものを学んでい
ます。社会人になってその有難さに気付くのは
先のことかもしれませんが大切にしていし
いと願っています。

〔藤原めぐみのお父様より〕

『早慶戦観戦記』

娘が四年間大変お世話になり、ありがとうご
ざいました。早慶戦の観戦記(と言えるほど
のものではありませんが、)お送りします。
早慶戦は、文字通り有終の美でした。素晴ら
しいゲームをありがとうございました。四年間
で早慶戦を開会式から終了までフルに見さ
せていただいたのは今回が初めてで、そし
て最後になってしまいました。早稲田大学で
開催の早慶戦も見ておけばよかったと思
います。
早稲田は学生のトップであり、ひとつも勝て
ないのではないかと考えていましたが、生徒
達皆さんはよく頑張ってくれました。男子ダ
ブルスの勝利は素晴らしいもので感動しまし
た。一年生の植田さんも敗れはしたものの将
来の活躍を約束するような好ゲームでした。
これからが楽しみです。

最後のゲームが終わって娘の涙を見たとき
に娘だけでなく、生徒の皆さんが伝統や学
校の威信を背負いながら、リーダーシップを
発揮して部活をまとめていくのは大変なこと
だったのだからと、あらためて思いました。
娘には「よくやった。お疲れ様。」と言葉を
かけてやりました。勿論、監督さんや同期生や
OB・OGの方々の支えもあってできたのだと
思います。生徒たちにとっては貴重な経験
をさせてもらえたわけで、必ずや今後に関
与すると思えます。

監督さん、部の皆さん、OB・OGの方達、関
係者の方々、あらためまして本当にありが
とうございました。

〔和栗恵のお父様より〕

『秋季リーグ戦を観戦して』

私も三十年近く前に部活動をセカンドブライ
オリティと考えている大学(神奈川県内)の
体育会サッカー部に所属していました。当時、
東海大学がトップで防衛大学や、関東学院
大学が強豪校でした。これらのチームに勝
つのは並大抵ではなかったのですが、負け
たときの言い訳が、「我々はセレクションされ
て大学に入ったわけではない。我々なりに
一生懸命にやっている。負けても仕方が無
い。」という言い分が目立っていました。
しかし、戦う以上、勝つことを目的としてい
ますし、負けたときに素性を言い訳にするのは
余りにも情けないと思います。今般、私が観
戦した試合で、勝った試合は良いのですが
負けた試合の選手がどのように気持ちを整
理したかが非常に気になりました。つまら
ない言い訳をしているのであれば、その人
にとって成長の機会を逃しているように思
えました。

大学生活は勉強にしろ、部活動にしろ、厳しい
社会に出たときに必ず役に立つものであり、そ
れだからこそ若い力をその時期に傾注する価値
があるのだと思います。

社会に出れば、道具の良し悪しは関係なく、素
手で戦わなければならない局面が多くあります。
拝見している限り、慶応大学には多くのOBが出
席され、現役選手が試合を終えるたびに彼らの
声を聞き、助言を得ているようです。短期的なア
ドバイスは必要でしょうが、出来ればこの先長い
人生に関するアドバイスが現役選手にとっては
必要なのではないかと思います。当然、そんな
話を試合終了毎にする必要はないでしょう。そし
て、セレモニー的なことに時間を費やすのは選
手にとってもOB、OGにとってもメリットはないで
しょう。
競技上のアドバイスは監督に一任し、一人の人
間が成長する上でのアドバイスは別の席でしっ
かりして頂いた方が学生にとっても諸先輩方
にとっても効率的ではないでしょうか。また、親と
してはその様なアドバイスのあり方を期待してい
ます。

〔渋谷康太のお父様より〕

『早慶戦を観戦して』

先日、妻に誘われて長男が慶應大学に入学し
て初めてバドミントンの試合を見た。それが伝統
の慶早戦とあって学生時代にタイムスリップした
ような興奮を久しぶりに覚えた。
五月女監督にまずご挨拶させて頂いたが非常
に情熱を持った監督で子供達の自主性を尊重
ししっかりと考えさせるとともに躰も厳しい方との
印象を持った。子供達も伸び伸びとしながらも
礼儀正しく、最近の大学生の常識の欠如とはど
ろあえず無縁であると感じ、まずはほっとした。
選手紹介、塾歌斉唱、エール交換とセレモニー
が進む。両校の学生とも何とも元気がない。せ
めて元気は早稲田に負けない気合いを塾生に
はみせてほしい。

いよいよ試合が始まった。早稲田との実力差は
承知していたが、バドミントンは番狂わせが元々
少ない競技、やはりなかなか勝てない。ただ感
心したのは、塾の子供達誰一人、決して試合を
投げなかったことだ。唯一勝った試合以外も点
数以上の善戦で見ている拳に力が入り、思わ
ず応援の声が出てしまった。勝つ事にこそ意味
があると言う人もいるかもしれない。でも私は大
学の体育会活動は社会人になる前の人格形成
の修行の場としての価値が高いと思う。その意
味では慶應バドミントン部の子供達は五月女監
督の指導の下、良い人生修練を積んでいると感
じた。
試合が全て終わった。早稲田の学生に一人怪
我人が出たのは残念であったが、我が子の成
長を実感できた一日だった。

〔中嶋優のご両親様より〕

『早慶戦の感想』

優は中学時代バスケット部に所属してありまし
た。高校に進学したらバスケットをやるものと当
然のように思っておりました。

バドミントン部に入ると聞かされたときは
「エ～」と思ったんですが、その理由は山
梨県では強豪校であり、指導者の全国
トップレベルで活躍していた岩佐先生(早
稲田、H四年卒)に憧れたからです。岩
佐先生の指導のおかげで、充実した日々
を過ごせたと思っています。

慶應に進学が決まったときに、岩佐先
生から早慶の対抗戦があることを知らされ
ておりましたので、観戦する事を楽しみに
しておりました。早慶は我が家三代に亘る
悲願でしたので、その憧れの地に行ける
ことが、密かな楽しみでもありました。

日吉に二回、早稲田に二回訪れた事は
いい思い出です。早慶のエール交換、一
致団結した応援、特に四年生の最後の
早慶戦に挑む真摯な試合振りには観客
席にまで伝わり、いつも感動を受けてお
りました。

しかしながら、四年間やり通した事を何
よりも嬉しく思っています。監督、コーチ、
又先輩諸兄等の御指導に感謝しておりま
す。そして私どもの応援での最後の早慶
戦も終わりました。感動を有り難うござい
ました。
今後の両部のさらなるご発展をお祈り申
し上げます。

〔森本修介のお母様より〕

『早慶戦後の引退に際し、 感想と感謝』

先日の早慶戦ではダブルス、シングルス
共に勝利を収め、引退試合に花を添える
ことができました。これも日頃から皆様
のご指導、ご支援があればこそその結果と心
より感謝を申し上げます。留学から帰国
後は、体調を崩し辛い日も多かったよう
ですが、五月女監督を始め、沢山の方々に
支えられ、なんとか最後の引退試合まで
こぎつけ、完全燃焼できたようです。修介
が「五月女監督に『親孝行できてよかった
ね』と云われた」と嬉しそうに話してお
りました。私も「最高の親孝行だね」と言
って笑いましたが、本当に最高の親孝行を
してくれたと思います。四月以来、行ったり
来たり落ち着かない生活をしておりま
すが、ニューヨークに戻るのを遅らせて観
に行つて本当によくかったです。

修介が大学バドミントンを引退し、「これ
でわが子の試合を観るのも最後か」と思
うと感慨深いものがありました。その際、ふ
と修介がバドミントンを始めた頃のこと
が思い出されました。初めてバドミ
ントン部の門を叩いたのは、中学一年、
若葉の眩い季節のことでした。最初は
シャトルに当てるのもやっと、素振り
からのスタートでした。初めて先輩と
出たダブルスでは、確か0とか2ぐら
いで大敗したと記憶しています。小
学校時代は六年間、病院通いの日々
であったこともあり、入部当初は部活
もどこまで体力が持つかと心配し、ま
さにゼロからのスタートでした。

7-5. ご家族からの寄稿

。ですから勝てなくても当たり前、親としては元気で楽しくやってくれば、それ以上何も望むことはありませんでした。中学入学後も、暫くはよく熱を出しつつも心配が尽きませんでした。特に夏の合宿後は、毎年必ず無理が祟って熱を出しておりました。そんな経緯もあり、わが子の体が心配で、居ても立ってもいられず二度三度と遠方の試合会場に足を運びました。そして、その度に少しずつですがわが子の成長を発見し、試合には負けても嬉しかったのを覚えています。「負けても元気で頑張ったら嬉しい。でも、もし勝ってわが子の喜ぶ姿が見られたら尚嬉しい」親バカですが、そのような「這えば立て、立てば歩めの親心」の心境でした。修介もそれに応えるかのように、次第に体力もつきバドミントンも上達していきました。あれから九年半、月日は流れ、やせっぽちゃだったわが子は、心も身体もバドミントンと共に成長していきました。私共もバドミントンを通じて随分と楽しませてもらいました。最初は息子が倒れはしないかと心配で見に行っていたバドミンの試合でしたが、いつの間にか観戦するのが楽しくなって、気がつけばほとんど毎回観に行っておりました。その生活はすっかり馴染み、大学に入ってからも何度も記念館や試合会場に出かけて楽しませてもらいました。毎回たくさんの先輩方のご指導や応援に駆けつけて下さり、また日頃から色々な面でサポートして下さっているのを目の当たりにし、いつも言葉では表しきれない感謝の気持ちを感じておりました。よく世間では三田会の絆は他大学と比較して強いと云われますが、その理由が私なりに少し分かったような気がしています。人が人に優しくされて、思いやる心を持ち、優しい心になれるように、OB先輩方から受けたご厚意や激励は学生達の心に響き、何年か後に、社会に出た時、生活していく上で彼らの考え方の指針となっていくように思います。そして彼らが現役時代に先輩方にして頂いたように、今度は彼らが後輩の面倒を見ようと自然に思えるようになるのではないかと感じています。そういう繋がりが体育会の良さではないでしょうか。修介にも先輩方への感謝の気持ちを忘れず、今後は後輩への指導や応援を通じて恩返しをして貰いたいと思います。修介は慶応義塾体育会バドミントン部を通じてすばらしい先輩方や仲間に出会いました。「バドミントンが上手になりたい。勝ちたい」そんな一心で日々頑張ってきたとは思いますが、引退し、今振り返ってみれば、彼らには勝敗よりも、もっと大事なものが見えてきているのではないかと思います。本当に大切なものは一緒に頑張ってきた仲間であり、その過程にあるということ。日が経つごとにその意を強くすることと思います。

皆様には本当にお世話になり誠にありがとうございました。心より感謝を申し上げます。バドミントンを通じて先輩方や仲間から学んだ「人を思いやる気持ち」「協力することの大切さ」「辛くても最後まで諦めずやり遂げる力」など、今後、社会に出て大いに役立つことと思います。これらを糧に、修介を含めバドミントン部の仲間が社会でも大きく羽ばたいてくれることを願っております。

【真栄城優(主将)のお母様より】

『一〇月三十一日バドミントン早慶戦』

三十一日のバドミントン早慶戦は、双方の大学の歴史ある大会であり、息子の大学四年間の集大成でした。この早慶戦を間近で観戦、応援し、忘れられない一日となりました。早いもので、四年前に、息子と構内の銀杏並木を歩いて、入学式に列席した時は、自宅から近く、通学にも便利で、良く合格したと感心し、当時の安西学長の式辞の中で、いろいろな事を経験して欲しいとの言葉がしっかりと脳裏に残っておりまして。

サークルもいくつか参加し、息子が選んだ体育会バドミントン部。優秀な先輩方に恵まれ、勉学に、ゼミに、そしてバドミンの練習に費やし、四年に進級主将となった時は、希望と自信と不安を混じえながらも、伝統ある部を担って行く決心をして、逞しくなったと感じました。しかしながら、勉学と体育会との両立は厳しく、近年にない就職活動の厳しさも降りかかり、本人の意志とは裏はらに、なかなかまとめられないチーム、チームの位置も下がり、大変な一年間であったと思いを巡らせながら、観戦致しました。対する早稲田は、他のスポーツと同様、バドミントンでも、高校時代から全国的に活躍された学生さんが多数いらして、これから社会人となってもバドミントンで期待されている早稲田生に、慶應生は胸を借りて、どこまで対戦できるかの一戦一戦でした。スキル、体力方面はもちろん、学ぶべきものがたくさんあった対戦であったに違いありません。最後の主将戦の早稲田の主将は、今年のインカレで優勝、本当に上手だと思ひながら観戦しました。

12月号のバドミントンマガジンの表紙を飾り、これからのバドミントン界を背負って行く一人と息子は、対戦し、一戦目はほとんどポイントをとられ、直視できませんでしたが、二戦目はある程度ラリーが続き、会場の皆様の大きな声援を受けて、親バカではありますが、息子は幸せだと感動しておりました。この試合のみならず、全試合を通じて、会場に響く仲間への声援は、慶應生の方が勝っていたのではないのでしょうか。早慶共に錚錚たる先輩方の対戦を含め、試合結果も大切な事実ではありますが、それ以上に、共に戦い、交え、友好を深め、これから先の未来にも互いにエールを交換してゆく事が重要であり、貴重な対戦の日であることもあらためて知りました。

この日まで、根気よく熱心にご指導頂いた五月女監督に、この書面を借りて、あらためて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

【船矢竜太(四年)のお母様より】

『バドミントンと息子』

出合いは小学校の頃だった。中学校の青少対主催のバドミントン大会に参加するために放課後練習を重ねていた。我が家は兄もバドミントンが好きで、二人のつながりはバドミントンだった。また、近所にやはりバドミントンが好きな兄弟がいて、市の体育館や家の前の道路で時々練習をしていた。でも、小学校の時も、中学校での部活もバスケットボール部だった。バドミントンを部活でやり始めたのは、高校の時だった。それから七年。こんなにもバドミンの虜になるうとは思わなかった。それに比べ、母はほとんど試合にも行かず、外で傍観しているだけだった。来る日も、来る日もバドミントンだった。どこがそんなにおもしろいのだろうとも思ったこともあった。何かにとりつかれたように続けた。毎日何枚の練習着を洗濯し続けたことだろうか。でも、その洗濯の多さが、頑張っている証拠だとも思っていた。家族で出かけようを持ちかけても、部活を理由に行けないと言うこともあった。内申、「本当に、そんなにやっているのだろうか？」と疑うときも正直あった。練習の様子や、試合のことなどあまり口にはしなかった。実はたまにインターネットで部活の様子をのぞいてはいたが、時々、試合だと出かけるとき、「頑張ってるね。」と言うだけだった。たまに食事の時話題にすることはあったが、あまり詳しく知らなかった。高校の時、同じ部活のお母さんから「船矢君頑張っているね。」と言われて「ああ、やっばりそうなのだ。」と思うこともあった。でも、彼にとってバドミンの重さは、想像以上のものだったに違いない。バドミントンが彼の高校生活、大学生活を支えてきたに違いない。彼の学生生活からバドミントンを取ったら、味気ない思い出しかきつと残らないのかも知れない。バドミントン部を理由に、留年もした。本当の理由は分からないけど。ちょっとショックだった。でも、自分の人生。自分が決めて自分の力で歩いていくな。思い起こせば、この母も、大学生活はほとんどESSの生活しか知らなかった。きつと、同じであろう。でも、母は留年はしなかったけど。しかしながら、バドミントンがあったから、いろいろなことも乗り越えたらうに違いない。高校2年の時、父が癌で逝った。この母も教師という職業があったから、子ども達の姿があったから、家族の姿があったから乗り越えられた。息子にとって、その支えはバドミントンだったかも知れない。今、そのユニフォームを脱ぐ時期がきて、母もちょっと寂しい。洗濯物の枚数がかかり減った。「あんなに毎日、毎日、バドミントンと言ってきたのに、これからどうするのだろうか？」とも思った。「これからも、バドミントンを続けたい。」と言った。「就職してからも続けたい。」とも言っている。

7-5. ご家族からの寄稿

就職してからなんか出来るかなとも思うが、でも、そう思わせるだけの魅力を感じさせたバドミントンの力はすごい。いや、そう思うだけのめり込んだことがすごい。これからも、きっとバドミントンは彼の支えになって行くだろう。そんな大事なものを持っていてこの先生が生きることが幸せだと思ふ。その思いを持ち続けていって欲しい。また、そんなすばらしい部活で共に頑張ってくれた他の人たちに感謝したい。

[植田啓生(四年)のお母様より] 『早慶戦を観戦させていただいて』

慶応大学バドミントン部の皆様、先日は無事五八回目の早慶戦開催の大役を果たされ、本当にお疲れ様でした。息子から大切な試合だと聞いていたとおりの両校の気迫あふれる戦いの一日でした。

息子は中学時代からずっと「家族がいると緊張するから試合には来ないでほしい」と言っていたため、実は私はバドミントンの試合を間近に観戦したのは初めてでした。ですから今回は見に来てほしいと言われ、いそいそと試合観戦に出かけたのですが早慶戦は想像以上に真剣な舞台で、ちょっとびっくりしました。ウォーミングアップやエール交換、各試合の応援や審判等、すべてにおいて皆さんが真摯に取り組んでおられる姿を見て、これは私も真剣に観戦しなくてはと思い直した次第です。

一番心に残ったことは、慶応大学の選手の方々はもちろんのこと、実力が全国トップクラスの早稲田大学の選手の方々も全く手を抜くことなく、どの試合も全力投球で戦っておられたことでした。特に主将対決で、真栄城主将が早稲田大の上田主将の容赦ない鋭いスマッシュに必死にくらいついておられた姿には胸が熱くなりました。真栄城主将は慶応大学の全部員の思いと五八年の歴史を一身に背負って戦っておられるのだなと感じました。もちろん早稲田の主将も同じだったことでしょう。でも両校が毎年このような真剣勝負をしてこられたからこそ、早慶戦は五八年間、脈脈と続けられてきたのだと思います。そして、きっとそれが本物の伝統というものであって、またその伝統を守る一人として日々努力しておられる皆さんは、なんて幸せな若者なのかしらと、親としても本当に嬉しくなりました。この早慶戦が、ほかの大きな試合とは別格で、一年が早慶戦で始まり早慶戦で終わる意味も良くわかる気がしました。

もう一つは学生時代にこんなに一所懸命打ち込めるものがあることは本当にすばらしいと思いました。もちろん楽しいことばかりではなかったでしょうが、バドミントンに費やした日々と一緒に頑張ってきた仲間は、きっと皆さんにとって生涯の財産となるに違いありません。最後になりましたが、五月女監督をはじめ、先輩や部員の皆様には本当にお世話になり感謝いたします。息子は何度となく学業や進路のことでくじけそうになり、とてもバドミントン部との両立ができないように思えた時期もありました。部活の皆さんにも散々迷惑をかけたように聞いております。

でも、そのたびに監督や仲間の皆さんに励まして頂いて何とか四年生の早慶戦までこられました。それは息子にとっては悲願だったのですが、これからは一生の宝になることでしょう。本当に皆様ありがとうございました。それでは皆様これからも頑張ってくださいね。慶応大学と早稲田大学のバドミントン部のますますのご発展を心よりお祈りいたします。

[清家薫(四年)のお父様より]

『いいきげんのとき』

◇慶応義塾体育会バドミントン部ホームページ『部員日記リレー』

〔二〇一〇年一〇月二〇日
四年 清家薫〕より一部抜粋

『この部でこれまで活動してきた中で得たことは、「自分自身」に関して、よくよく理解することができたということです。部活動を通してこんなに自分のことを見つめることができるのは、思っただけで来たんです。』『でもいちばん思うことは、ここまですれ違ったのは、他の人たちの支えなしではありえなかったということです。たくさんの人たちに支えてもらいながら最後の早慶戦を迎えられる自分は幸せ者だと感じます』
これを読んで、まずは「えっ!!」「あの薫がこんなにしっかりした文章を書けるようになったのか」というちょっと意外な感じをもって驚き、「親元をはなれていろいろと苦労し、周りの方々に支えてもらうような体験をたくさんしてきたんだろうなあ」とバドミントン部の皆さんへの感謝の気持ちでいっぱいになりました。

◇これまで

「バドミントン部の活動によって薫がどのように変化していくのかな?」と関心を持って見守っていました。私に対しては、シンスプリントやインフルエンザなどケガや病気のことでも連絡をしてくれることが何度かありましたが、心配事や悩みなどの相談を持ちかけてくることはまったく無く、そのため、何を考えているのかどんな悩みがあるのかなど、今でもよくわからないままです。このように、普段はほとんど自分の感情を親に見せたことのない薫でしたが、これまでに本人が自分の気持ちをストレートに表に出したことがある中で、印象に残っていることが二つあります。一つは高校生のときに発した「私は勉強が死ぬほど嫌いだ」という言葉と、もう一つは、小学四年生のときに書いた『人間のきげん』というタイトルの「本」です。この本の中に、薫らしさが表れている詩がありました。

いいきげん

あなたの いいきげんのときは
どんなとき。

私の いいきげんのときは
すずしいとき

がっこうのしゅくだいがないとき

りょうこうにいっているとき

友だちとあそんでるとき ぐらい。

まあ まとめていうと

『幸せ』なとき。

◇あとすこし

大学生活もあと少し、これからもバドミントン部の皆さんといっしょにたくさん「いいきげん」のときを過ごさせていっただいて、卒業の日を迎えて欲しいと願っています。

[榎本論(一年)のお母様より]

『二〇一〇早慶戦を振り返って』

大学入学後、「体育会のバドミントン部に入部しようと思う」と、息子から聞かされたときは大変驚きました。何しろ中学三年生で患った『起立性調節障害』という病気のおかげで貧血が続き、医者からも太れない体質だと聞かされていたので激しいスポーツについていけるのか、また周りの方に迷惑をかけるのではないかと心配しました。

そんな心配をよそに息子は何とか夏を越え、早慶戦を迎えました。試合にこそ出ませんが、この日を部員として迎えられる、母として嬉しく思いました。私のささやかな自慢?は、子供の会話に出てくる人の名前をしっかりと覚えることです。慶應体育会バドミントン部のメンバーもHPでしっかりチェックしているのでお顔とお名前も全て合致しておりました。また前日早慶戦のパンフレットにも目を通していたので対戦相手の早稲田のメンバーの知識もあり、試合をより楽しむことが出来ました。

伝統の早慶戦といえども、力の差は歴然とあり、何とか食い下がろうと頑張る慶應の選手に対して早稲田の運動量の少なさが対照的でした。才能といってしまう身もふたもないのですが、埼玉栄、ウルスラ、青森山田などのインターハイの常連校出身者で構成されている早稲田の強さが際立った試合ばかりでした。三年の柳原さんが部員日記でコメントされていたように、外から見ていた強豪と実際手合わせできたことが収穫だったかもしれません。相手の強さを肌で実感し、その経験を生かして実力差のない相手には決して取りこぼしのないように戦って一步一步昇格に近づいていってほしいものです。

そんな中で四年の船矢さんのひたむきな試合は感動しました。またそんな彼を応援する部員達の真剣な眼差しはとても好感的なものでした。こうして初めての早慶戦観戦が終わりました。いつも部員日記で親しんでいた選手の皆さんの勝負にかける姿を観ることが出来てとても有意義でした。今後も機会があれば是非お邪魔したいと思います。また、あわただしいお時間の中、私どもにまでお声をかけていただき恐縮しております。

7-5. ご家族からの寄稿

温厚というより争いごとが嫌いなだけ、真面目というより不器用なだけ、そんな未熟な息子ですが、伝統あるこの慶應体育会バドミントン部で成長できるよう応援していきたいと思っております。これからもご指導よろしくお願い申し上げます。

[山口哲生(四年)のお父様より]

『慶早戦に思う

-慶応義塾体育会バドミントン部へ』

これまで、毎年夏休みに、東京・横浜の観光旅行を兼ねて、家内と日吉の記念館の練習を見に訪れていましたが、まず、今でも忘れられないのは、初めて日吉の記念館を訪れた3年前、哲生と合流してお昼でも食べに行こうと気軽な気持ちで体育館へ出向いた時のこと、当時の光井主将から丁寧な挨拶を受け、更に部員全員が集合し、挨拶をしていただきました。

衝撃的でした。私も中学校から大学まで体育会運動部に所属し、今もプレーを続けていますので、体育会の雰囲気には慣れていますが、慶応バドミントン部のそれは、実にさわやかな中に規律が見られ、正直感心しました。哲生が慶応へ入学しバドミントン部に入部したこと(正直入部するとは思っていません)を本当に良かったなあと感じたのを覚えています。それから毎年、夏休み(丁度合宿中)に日吉へわずかな差し入れを持って出向くのが楽しみでした。渋谷主将、真栄城主将の時代も同様に大変素晴らしい印象を受けました。それだけに、哲生が主将になったと聞いたときには、ちょっと心配でしたが、時折見るバドミントン部のHPで、部員のみなさんと頑張っている様子が伺え、頼もしく感じました。また、その中でも哲生をはじめ部員の皆さんの慶早戦にかける「思い」というものが、ひしひしと伝わってきました。

十月三〇日に、哲生の最後の慶早戦ということ、また、五月女監督からのお誘いもあり、東京まで出向きました。今まで大会等は見学したこともなく、哲生が真剣にプレーするところも見ただけではありませんでした。

また、早稲田のHPを見て、部員の方々の素晴らしい選手経歴に驚きました。これだけ大学入学時に実力差があるとなかなか追いつけないのもよく分かります。また、そういう環境の中で練習すると、スタートが同じ様なレベルでも、切磋琢磨で実力もアップすることでしょう。しかし、私が感じたのは、そういう実力差をよく理解しながら、「慶応」「早稲田」という看板を背負って互いに頑張る素晴らしさだと思います。強い相手に何とかしようと挑戦する「慶応」と負けられない相手を全力で迎え撃つ「早稲田」という印象を受けました。

私は、スポーツの教育的な意義(人格形成への影響)は、「勝って、なせばなると確信することや「努力が報われたと満足すること」等ではなく、「頑張っても頑張っても、才能に限度があることを知り、勝てない相手が存在することに耐えて、自分を見失わない」ことだと思います。

慶応バドミントン部の皆さん、皆さんが大学生活の大半を使いバドミントン部に打ち込んだことや、これから打ち込むことは、皆さんの未来に間違いなく大きな影響を与えます。卒業後、社会人として充実した日々を送られることをお祈り申し上げます。また、これまで哲生を支えてくれた同期の皆さんやついてきてくれた後輩の皆さん、多分ものすごくお世話になった五月女監督をはじめとするOB・OGの方々にも心より感謝申し上げます。

最後に、哲生のいいかげんな連絡と極めてドライな家族の特性のために、東京までの旅費等三人分と丸二日の休日を使いながら、見られた哲生のゲームがダブルスゲームのみになってしまったことを申し添えておきます